

---

# 真?恋姫無双～名門の血筋～

梅干し

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真？恋姫無双〜名門の血筋〜

### 【Nコード】

N4578L

### 【作者名】

梅干し

### 【あらすじ】

ある日、ある場所で男は死んだ

しかしその男には後悔は無い

そして、目が覚めると暖かな腕の中だった。

新たな命で進む道は、遙か昔、英傑達が過ごしてきた日々で???

転生物ストーリー『真？恋姫無双〜名門の血筋〜』 始まります

## 注意

これは最強物ではありません  
また転生モノ、原作レイプ等ありますので嫌な方は見るのはオススメしません

それでも良い方は誤字脱字、不定期更新だとは思いますが  
暖い目で見ただけだと嬉しいです

## 第零話 平和な日常から、非日常へ

それはある晴れたいい日だったんだ。

今日も平凡ながら、友人達と賑やかな日を過ごせると俺は思ってた。だつて???、そうだろ？

誰がこうなるなんて予想できるんだ？

プロローグ

『平和な日常から、非日常へ』

「おお〜い」

「すまない、遅れたか？」

「うっん、そんな事ないよ」

「そうだよねえ〜、真奈美ってばそわそわしてただけだもんね？」

「…っもう! / / ちーちゃん! / /」

今日は休日で、近々始まる文化祭の準備品を買う為に

生徒会のメンバーで買い物にきた。

そして、今日の前でプンスカ怒ってるのが、副会長の「北条 真奈美」

成績優秀で、才色兼備と言う文句なしの人だ。

腰まである黒い長髪と、日本人特有の背の小ささがあいまって可愛さがひき立っている。

その真奈美を怒らせた隣りにいる女性は「高瀬 千夏」我が生徒会の鬼の会計だ。

陸上をやっている為、うっすら焼けていて健康的な雰囲気を出していた。

髪は肩ぐらいまであり、焼けた肌をひき立てる様な紅い髪をしている。

そんな彼女は、俺達の中で一番背が高いのが密かにコンプレックス

なんだとか

「ん？大輝は？」

「あゝ、なんか連絡しても出ないんだよね」

「どうしようか？」

「もうちょい待ってみるか」

今出てき名前の奴は書記の「林屋 大輝」俺の親友？？？悪友？だ。俺は推薦されて入ったが、大輝は自ら立候補をした。

した理由も「お前が入るなら、楽しそうだろ？」と言った時は呆れる様な、嬉しい様になって感じだった。

髪は赤茶色で短かく顔も悪くない為、モテるはずなんだが趣味のせいでモテないらしい

仲良くなっても

良い年上、良い友達、良い年下ぐらいにしかならないとか

「ハア…ハア…ハア」

「おっ、噂をすればだな」

「アハハ！走ってる走ってる！」

「もう！そんな事言っちゃ可哀相だよ」

「ハアハア…スマ、ン…寝坊した」

「良し行くか」

「ちょ！少しは休m「寝坊」すいませっんしたああ！」

「ふふふっ」

「アハハ！」

それからデパートで買い物をし、女子達が欲しいモノがあるらしくそれに付き合ったりしているうちに夕方近くになっていた。

「ふいゝ流石に疲れたな」

「お前はナンパしてたろ」

「それがなにか？」

「よし、殴らせる」

「ごめんなさい」

買い物が終わわり、一息つくため喫茶店に入ることにした俺達

「ねえねえ、高須君はなに飲む？」

「俺、アイスマイルク「アンタに聞いて無いってミルク?! ティーじゃなくて?!」悪いかちきしょー!」

「俺は烏龍茶でいいや、北条さんは？」

「私はアップルティーかなあ」

「龍二さん!俺はミル「お前はオレンジな」死んじゃうから!俺逝っちゃうから!」

「あゝ、オレンジ駄目なんだっけ?...フヒヒ」

「な、ナンですか高瀬嬢」

「定員さん、アップルティーと烏龍、後オレンジ二つお願いしまゝす」

「いやああ「うるさい」うるう...扱い酷くないか？」

昔からオレンジが苦手らしく、見るのも嫌なんだとか

ちなみに遅れたが、俺の名前は「高須 龍二」しがない生徒会長だ。

閑話休題

そんな風にまったりしていると運命の事件は起こった。

「おらあ! テメエらおとなしくしやがれ!」

「キヤアアア!」

「?!なんだ!」

それは男達数人の強盗と

「オイ! 動くな!」

「やめっ! 痛いです!」

トイレから戻る途中の真奈美の姿だった。

「真奈美!」

「北条さん！」

「高須君！ちーちゃん！」

幼い頃から武術を習っていたので奴等を倒せるが目視で四人、厨房に何人かいる様で身動きが取れなかった。どうするか悩んでると…

「嬢ちゃん可愛い顔してんな

どれ、楽しませて貰おうかねっと！」

「っ?!…キヤアアア！」

目の前で真奈美の服が破かれ

それを見て、頭が白くなってしまった。

「オイ」

「あん？これから楽し「オラア！」がああ！」

俺は覆い被さるうとしてた奴の股間を蹴りあげた

「お前、俺の友人に何してんだ」

「テメエ！動くな！」

「ちっ！」

声を聞きつけたのか、男の仲間達が集まって来てしまう

「高瀬！北条さんを！」

「っ！分かった！」

「高須君！」

俺はナイフを持って襲ってくる奴等を躲しながら、返事をする

「大丈夫だから！」

大輝が警察呼んでる筈だから、早く逃げろ！」

そう言いながら、ナイフを突き出してきた奴の腕を取りへし折る

「ギヤアア！」

「ッ！テメエ！」

「遅い！」

つこつんできた男を足払いし、倒れそうな所を肘で首を殴り追い討ちをかける

「グッ」

この時、頭に血が上っていないければ

「ふう、終わったか？」

回りを確認できるだけ冷静でいられたら

「お前…だけはっ…殺す！」

「?!…しまつくグサツ！>グツ！」

「へへっ、へへへ…道、ずれだ…ぜ」

「ちっ、まず…い…」

新たな外史は生まれなかっただろう

「なにも…見えなくなつて、きた…か」

これもまた、運命

「なんか、聞こえる…な」

友人達を守つた男は

「ははっ…最後…は、笑つ…て死ぬ、か」

さも満足げに微笑んだまま死んでいったのだった

第零話 平和な日常から、非日常へ（後書き）

はじめまして

梅干しと申します

こんな駄文を見ていただきありがとうございます  
まだまだ初心者なので、書き方が変わったたりするでしょうが許して  
いただけると嬉しいのでは、次回にまた

## 第巻話 新しい命と、生活の中で

俺はあの時死んだ筈だった。

でも、眼が開くと美しい女性が目の前にいて

『新たな命と、生活の中で』

S i d e 麗華

私は姓が袁、名は成、字は本宗ーホンシュウー

そして真名が麗華ーレイカーと言います。

今私は妊娠中で、元気に赤ちゃんが産まれる様に散歩をして動いていました。

そこで、少し休憩しようと思いい椅子に近付くと

すぐ側に布の塊がありました。

「…何かしら？」

確認しようとする、それは動き出し

良く聞くと声も聞こえます。

「…?…?…?!、…まさか」

そう思い、布を取るとそこには…

「まあ…、かわいらしい」

クリクリした眼で私を見つめ、手を伸ばす赤ん坊がいました

S i d e 麗華 e n d

「うう…あう〜（うっ、俺は）」

「あう〜、えうあぶう（ここは、どこだ?）」

「うう?あう〜あぶう（確か、あの時刺された筈なのに）」

眼を覚ますと一面が白かった。

つていうか、死んだ筈なのに眼を覚ますとかこれいかに？

「あぶう、あうあう〜（にしても、この白いのは布か？）」

その布を取るうと腕を動かすが、なかなか取れないのだ。

「う〜！あぶう！（くそつ、取れない）」

必死に取るうとジタバタしていると、不意に明かるくなり綺麗な女性が現われた。

長く、美しい金髪で綺麗な蒼眼

そして人を引き寄せる様な笑顔があった

「あう〜（綺麗だ…）」

思わず、手を伸ばしてしまったのは悪くない筈だ。

「まあ…、かわいらしい

貴方は一人？」

「あぶう（そうです）」

「そう…、なら私と一緒にいきますか？」

「えう〜（よろしいので？）」

「ふふ、ちゃんと会話できてるのかしら？」

まあいいわ、一緒に行きましょうね？」

「あぶぶう、あう〜（助かります、身体が動かないもので）」

そして、この時から俺は新たな名前と家族ができた。

まあ、家に着いてから一悶着あったが…

閑話休題

アレから月日がたち、俺も今や五歳になった。

始めは気付かなかったが、何故か俺は赤ん坊になっていたらしい

「あの時は驚いたなあ」

そう、あの時拾ってくれたのが今の母上

「袁 本宗」その人だった。

赤ん坊になっていたのも驚いたが、母になったのが三国志の人物の母？とは到底信じられなかった。

普通は、男である筈の袁成が女であるのもおかしいし  
尚且つこの時代は「真名」と呼ばれる大事な名前、なんてものもあつた。

それでも「たまたまだ」「気のせいさ」と片付けていたが…  
等々ある出来事で信じるしかなかった。  
それは

「龍二にいさまあゝ！」

「ん？おお、麗羽走つたら危ないぞ」

「わかりましたわ！」

そう、今目の前にいる人物

その名も「袁 本初」言わずと知れた三国時代の嘯ませよ…じゃなく  
て名門の人だ。

母が袁成、妹が袁紹だと、諦めるしかなかった。

俺は何故か転生し、未来には曹操に敗北が決っている…

本来ならいない袁家の”長男”になってしまったのだった

第巻話 新しい命と、生活の中で（後書き）

ども、梅干しです

いかがだったでしょうか？

袁成さんは字が無いので作ってみました

性格的には、麗羽をお淑やかに、そしてクルクルじゃないのをイメージしていただけると助かりますw

ではまた次回

## 主人公設定（簡易）

名前

旧：高須 龍二

現：袁 悠 魄麒ーエン ユウ タクギー

真名：龍二

真名の龍二は麗華のふいーりんぐ

容姿

髪は長髪でポニーテールにしている

少し明るめの金色で陽の光が当たると輝いて見える事も

目は青く、目鼻も調っているので格好いい部類に入り

回りからモテるが天然で鈍感なせいで気付かない

性格的には温厚で優しいが、戦場では容赦ない一面も

君主として大望があり、自分の道筋を貫いている曹操は気に入っている

名門袁家の血筋はどうでも良く、皆で仲良く暮らせたら良いと思っている

しかしその為に血を流すのは嫌っているが割り切る事にした

蒼色が好きで自分の鎧もそれにしている

金とかが有り得ない

武術に長けていて、氣も使えるがあまり放出はできず

もっぱら武器や身体に付与して使っている

この時、早く動く為足に氣を使っていたのと

纏う鎧が蒼く、武器も氣を使うと蒼白くなるので蒼い麒麟になぞらえ、「蒼駆の聳孤ーしょうこー」などとのちに呼ばれる

## 第式話 未来を変える為に

先の未来を知った

新しい家族の未来を

だから俺は…

『未来を変える為に』

自分の行く末がわかってからは、修行の毎日だった。

動ける様になってから走り回り体力を。

昔の知識があるので軍事、政治など必要な事を覚えていった。

そんなことをしていたら、いつの間にか回りに「袁家の麒麟児」などと呼ばれる様になっていたのだ。

そして、今は日課になった塾の帰り道だ。

「ふう…、今日も頭を使っただな」

平凡で、平和な世界で生まれた俺には

兵法書など触れた事もなかったからな。

それにしても、歴史と言うのは

この世界もあまり変らないらしい

なんせ今行っている塾に

「あら、もう疲れたの?」

「ああ、考えるのは苦手なんだ」

「ふうん…、そんな人が私と議論できるとは不思議ね?」

「気のせいだろ」

そう、このお方

いづれ魏王と呼ばれる「曹 孟徳」その人だった

我が妹もそろそろ大きくなってきたので、塾に行く事になった。その際、家で鍛錬ばかりは駄目だという話になり俺も行く事になった訳だ。

(嫌な予感はしてたんだよな…)

そう、案の定まだ幼いにも関わらず

既に王のオーラを醸し出している曹操殿がいたのだ。

関わるのは嫌だったので、なるべく接するのはやめてたんだが何故か向こうから寄ってきやがりました。

Side 華琳

私は曹 孟徳、母上の言いつけでこの塾に通う事になった。

一人で書物を読み、勉強していたのが見つかったのだ

だから渋々通う事にしたのだが

正直、差がありすぎてつまらない。

にも関わらず、権力しか見ない回りに呆れていた。

(はあ…、ここは勉学を学ぶ所ではないのかしら?)

そんな日々を過ごす内に、ある事を知った。

(…今日もやってるのね)

ここでただ一人、寡黙に学ぶ人物がいる

名を袁 魄麒、知る人ぞ知る麒麟児だ。

なんでも僅か二才で喋り、五才には既に氣を扱えたとか。

何よりも、人には媚びず

己の力だけで今の自分を築き上げてるのが興味を惹かれた。

だから私は、此所に来て初めて自分から声を掛けることにした。

「ねえ、貴方の名前は？」

Side 華琳 end

困った事はこれだけじゃなかった。

何故か声を掛けられてから、仲良く？なり麗羽と曹そs…もついか…

華琳の家に初めてお呼ばれした時の事だ。

そこには華琳の部下になる夏侯：姉妹がいたのだが

その姉がいきなり切りかかってきたのだ。

そのせいで思わず反撃をしてしまい

尚且つきなりでムカツとして

まあ、つまりはボロボロにってしまった。

その際麗羽が

「あの時の龍二お兄様は、凄く悪いお顔で反撃してましたわ」と言われてしまった

## 閑話休題

それからというもの、華琳に会うと

「龍二、そろそろまた来てくれないかしら？」

春蘭が会いたがってるのよ」とか

秋蘭（襲われた時に詫びとして教えて貰った）には

「龍二、悪いがそろそろ姉者に会いに来てくれないか？」

兵達が訓練として大変な目に遭ってるんだ」などと言われる事になつてしまった

とりあえず今日は

これから春蘭との手合が待っている…

## 第5話 未来を変える為に（後書き）

皆さんども

梅干しです

遂に登場の華琳さま、まだまだ始めの方なので説明じみてしまう・・・

・  
とりあえず本編に入ったら会話をもっと出してみたいですね

最後に麗羽の存在感がウスイwwww

お兄様ラブな感じを出したいです

でわまた次回

## 外伝一 強さの先に

始めは油断だと思った

負ける筈はないと自惚れてた。

だから私は…

『外伝 強の先に』

S i d e 春蘭

最近、華琳さまの機嫌が良い。

だから私の機嫌も良い

華琳さまの笑顔を見ると、嬉しくて仕方がないのだ。

「さあ、此所が我が家よ」

「へえ、でかいなあ」

「まあまあですわね」

「ふむ…」

「くっ…！」

しかし、今日はその笑顔を誰とも知らん奴に向けていた。

長い金髪のひよる長い軟弱そうな男に

「華琳さまに近付きおって…許せん！

たたっ切つてくれる！」

「?!…駄目だ姉者!!」

だから、華琳さまを守ろうと…

こんな男を近寄せない為に切り刻んでやろうと思った。

華琳さまが左側にいらっしやっただので、右側から切りかかった。

そうしたら奴は少し動いただけで躲し

驚いた私の腕を掴み捻ったと思ったら、既に私は空に浮いていた。

(…ああ、私は投げられたのか)

酷く長く感じた中で、そんな事を考え

背中に衝撃を受け私は意識を失った。

S i d e 春蘭 e n d

S i d e 秋蘭

私は眼を疑うしかなかった。

身内鼻肩をしても、姉者が負けるとは思わなかった。

それを見事な流れで躲し、捌き、反撃したのだ

(これが袁家の…奇才、麒麟児の力なのか)

私は華琳様に話を聞いていた

当初はうんざりしていたそうだが

最近楽しそうなので聞きしてみた。

すると、最近噂の袁悠殿がいるので楽しくなって来たそうだ。

その時の笑顔は稀にみる美しさだったのを覚えている。

それが今日

家に招待するというので楽しみにしていたのだが…

(まさかこんな事になるなんて…な)

慌てて助け起こしている袁悠殿を見て

微笑みながら近付いていった。

S i d e 秋蘭 e n d

今日は華琳の家にお呼ばれした。

行く前から嫌な予感ビンビンしてた。

(まさか…こんな事になるなんて…)

着いたと同時に、門の前にいた黒い髪の女の人が切りかかってきたので、思わず投げ飛ばしてしまったのだ。

慌てて見に行ったら気絶してて更に焦ったね。

とりあえず抱き起こし、華琳に部屋を聞いて連れてく事になった。

ちなみにこの時

華琳と麗羽の視線が鋭かったのは、別の話した  
閑話休題

「今気絶してるのが、夏侯 元讓よそれでこつちが」  
「妹の夏侯 妙才という、姉者がすまない事をした。  
こんな事で許されないだろうが、真名を貰ってくれ。  
真名は秋蘭と言う」

「いや…俺も悪いことしたしなあ、つと

俺は姓が袁、名が悠、字が魄麒ね

んで真名が龍二だ。よろしく」

「私は、袁 本初、真名は麗羽と言いますわ」

「別に貴女には聞いてないわよ」

「なんですつて?!」

くるくるおちびは黙ってて下さいまし!」

「おちっ…!!」

「なんですの?!」

「なによ!!」

(また始まった…)

華琳と麗羽は何故か仲があまりよろしくない。

こんな言い合いはしょっちゅうだ。

「ふふふっ」

「ん?秋蘭、何が面白いんだ?」

「いやな、華琳様が楽しそうだな」

「そうかあ?」

俺と秋蘭は隣りで喚いている我が妹と

未来の霸王をみてまあこれも悪くないと思ったのだった

おまけ

「おい龍二！また私と戦え！」

「うお？！ちょ！おま！」

「…どうして不意打ちなのに避けれるのかしら？」

「龍二の身体能力が高いのでしよう

こう見ていて、ふざけてるのに隙がありませんから」

「ふふっ、そうね」

「しゅ、春蘭！危ないだろ！やめろ！」

「?! / / しゅ、しゅしゅ春蘭などど！ / / 許した覚えはないぞ

！ / /

「ハア?! オイ！ まっ… ギャアア！」

外伝一 強さの先に（後書き）

皆さんども

今回は外伝をお送りしました

春蘭らしさとか出てくるかなあ

そこら辺が心配です

では、また次回

## 第参話 未来に向けて、人材確保 前編

「始めは只の冗談かと思った」「只の興味本意だと思ってた」

「でも…あの人の想いを聞いて」「あの方の理想を聞いて…」

「だから私達は…」

『未来に向けて、人材確保 前編』

今日は最近盗賊被害に遭つてるといふ、村に行く事になった。

俺はそこで生涯使えてくれる、初めての部下を迎え入れる事になる

S i d e 張 郊

私の名は張郊 倜乂。

この村の自衛団の一員です。

昔はこの村にいる人数で、なんとかやって行けてました。

しかし最近盗賊達が徒党を組んだらしく、人数には勝てませんでした…

そこで太守である袁成様に援軍を要請する事になり

近々来るそうので、細やかながらの歓迎の準備に追われていました。

「ふう、こんな感じかしら？」

「悠、こっちは終わったぞ」

「うん、わかった！」

この人は、高覧

私には両親がおらず、父の変わりみたいな人だ。

高覧も昔いろいろあった様で字も真名も無いらしい。

けど私は気にしてない

家族になるのに、名前とか関係ないから。

Side 張郊 end

Side 田豊

最近多発している盗賊達に備え、この国の太守に文を送りました。援軍も決まり、相手は三公を輩出した袁家の方なので細やかな宴会の準備をしていました。

そして、いらつしやった方を見て驚愕するしかありませんでした。

そう、稀代の奇才と謳われる「袁家の麒麟児」、袁 魄麒麟様でした。

「ああ、これは歓迎の宴会なのかな？」

「は、はひっ！」

（あうっ！声が！）

「そっか…ん」

悪いんだけど村の人達呼んでもらえるかな？」

「えっ?! わ、わかりました！」

（いけない！まさかこんな偉い方が来るなんて！）

こんな物だけじゃ足りないのかも！）

私は慌てて悠さんを含む、皆さんを呼びに行ったのでした。

Side 田豊 end

（今の娘…）

今俺は冀州の外れにある村に来ていた。

母上が言うにはなんでも

最近盗賊被害が酷いのでどうにかしてほしい

それを聞き俺が行く事にした訳だ。

（この村…というか

今回の件がなんか気になったんだよな）

華琳達の時もそうだったが、俺はこの時代に來て勘？が良くなったみたいで

悪い事も良い事も良く当る。

（今回は良い方みたいだな）

俺は期待に胸を膨ませていたのだった

閑話休題

S i d e 高覽

「袁悠様！村の者を集めました」

「うん、ありがとうね」

「い、いえ！／＼」

「…なにか不手際がありましたか？」

援軍に來たのは、最近噂の袁悠とか言う奴だった。

食料だつて盗まれてんに、わざわざ歓迎をするって言うから支度をした。

なのに気に食わないんだが知らないが、呼び出されたわけだ

（この坊主…騒ぎ出したらぶち殺してやる）

俺はそんな事を思いながら話しかけた。

「いや、歓迎は嬉しいんだけど

わざわざ助けにきた村の食料を貰うのもね」

そういつた奴の顔は苦笑いをしていた。

「だからさ…おい！」

「ハッ！」

「うちの食料もだせ

それでこれから我が軍とこの村の方達で、士気を上げる為に宴会をするぞ」

「こちらにお持ちすればよろしいですか？」

「ああ、その後は確実自由にしていい」

「わかりました、では失礼します」

「っとこんな感じでどうですか？」

俺は啞然としていた。昔、俺も軍に所属し戦っていた時期もあった。その時の隊長含め上の奴等は腐っていた。

金の為なら偽装した罪をきせ

腹が減ったからと盗賊紛いの事をし

町にいた可愛らしい娘がいたら偽りの罰をきせ慰み者に

そんな奴らばかりを見て俺は絶望した。

しかし、今日の前にいる奴は違うらしい

怪我人がいたら治療を

腹が減ってる者には食料を

こんな当たり前な事をできる奴を久しぶりにみた。

(こいつのためなら最後に頑張ってみるか…)

「…おいお前ら、袁悠殿を手伝いに向かうぞ」

「ういつす！」

だから俺は、今回の戦いに全力を注ぐ事を決めた。

Side 高覧 end

賑やかなうちに終わった宴会を抜け、明日の為に主要メンバーを集め軍議をする事にした

やはりと言うか、集まったのは最初にあつた娘と、先程殺気をぶつけてきた男。

後一人は見た事はないが

多分、この男の関係者だろう

自警団員の一人ではなからうか。

「じゃあ始めようか、まずは自己紹介からかな。

俺は姓が袁、名が悠、字は魄麒

それで、真名は龍二だ」

「「「?！」」」

真名を言った途端驚く三人：面白いな

「ま、真名まで良いんですか?!」

そう言ってきたのは、最初にあつた娘。

身長は小さいみたいで俺の胸ぐらいしかない

髪型は短く赤茶色で、癖っ毛なのか毛先が丸まっている

「ああ、一時とはいえ俺達の背中を任せるんだ

真名を渡すのは当たり前だよ」

そう言うのと例の男が笑いだした。

「ハッハッハッ!

アンタは変わっているな

俺の名前は高覧だ。

生憎真名を渡したくても無いんでな、許してくれ」

「はは、そうかね？」

ああ、名前だけで十分だよ

まあよろしいくな。」

(へえ…、たしか袁紹配下の武将じゃないか)

内心驚き流ら握手をした。

「…私はこの村の自警団で副隊長をしています。

名前は姓が張、名が郊、字が雋又と申します。

真名は悠です」

そう名乗ったこの娘は俺と同じぐらい背が高く、髪は黒に近い青で

見方によればほぼ黒にしか見えない。

髪型は首の後ろで束ねて括った状態だ。

「そっか、じゃあ悠って呼んでも？」

「は、はい／＼」

「龍二殿、こいつは龍二殿の噂を聞いて慣れてたんだよ」

「っ！ちよつと！高覧！／＼」

「ハハハッ!」

(オイオイ…高覧に張郊かよ)

袁紹の歴史的な大敗の時に、被害を被った人達の二人だ。

(たしか魏に降るんだよな どうにかできんかな…)  
そんな事を考えてると。

「あっ、あのっ！」

私の名前は姓が田、名が豊、字が元皓で

ま、真名が琥珀です！」

「うお?!」

「あつす、すみません！」

「いやいや、俺は龍二ね？」

俺からは琥珀って呼ぶからさ」

「は、はひっ! / /」

(今度は田豊か…これも運命、かね)

奇しくもこの時、本来なら袁紹に使える筈の三人と会い  
運命の歯車が回り始めたのを龍二はまだ知らない

**第参話 未来に向けて、人材確保 前編（後書き）**

皆さんども

梅干しです

今回は四人称に挑戦してみました

見にくくないですかね？

今後こんな感じで進めるかも。

次回は初の集団戦闘です・・・

旨く書けると良いなあ・・・

では、さて次回！

第肆話 未来に向けて、人材確保 後編

「突然の事で信じられなかった。」

「でも、あんなに真剣に見つめられたから」

「あの眼を信じようと、アタシは思ったんだ…」

『未来に向けて、人材確保 後編』

今、目の前には徒党を組んだ盗賊達がいた。

大体5〜6000人程度だろうか。

比べてこちらは4500人しかない。

俺が連れてきた4000人と、この村の500人の自警団の皆だ。

しかし負ける気はない。

いや、負ける筈が無い。

なんせこちらには将来の名軍師や名武将がいるのだから。

「聞け！袁家の盟友達よ！

相手は弱者しか襲えない只の素人だ！

叫べ！英雄達よ！

我らの家族を守るのだ！

全軍！！突撃いいー！！」

「うおおお！！」

「高覧隊は衝輓陣を！袁悠隊は長蛇陣を敷いて下さい！」

「お前ら！

真中開けられんなよ！内の大将はか弱いからな！」

「うつつす！」

「なっ！なにいつてるんでしか！／＼」

…大丈夫だよな？

S i d e 盜賊頭

「頭！奴等がきやした！」

「…そうか、アタシの隊の者は陣を敷け。

…他は知らん」

「わかりやした」

アタシ達は始め韓馥に使えていた。

だけど奴のやり方が気に食わなくて、辞めてやったんだ。

それからアタシ達は義賊になり、弱きを助け強きを挫いた。

それが何故か勘違いした馬鹿どもが

いつの間にか集まり、村を襲ってしまった。

(…もうアタシ達に、信条は無くなった)

だから最後ぐらいは武人らしく

華々しく散りたいと思っただんだ。

S i d e 盜賊頭 e n d

「ん？… 奴等の一部が陣形を敷いてるな…」

敵と当たってから気付いた。

ある一部だけ、統率が取れているのだ。

「こりや大当たりかもな。

よし、伝令！」

本隊に連絡！そろそろ大丈夫だ！」

「ハッ！」

頼むぜ、悠！

昨夜

「盗賊達の中に元將軍？」

「はい、元は將軍をしていたのですが

袂を別れて今は義賊をやっていたとかで」

「それが頭か・・・、なら厄介だな」

俺達は自己紹介を終えてから、作戦を練っていた。

当初は只の盗賊だろうから、そこまで深くは考えなかった。いくら徒党を組もうが、訓練を受けた兵達が遅れを取る筈は無いからだ。

しかし、元でも将がいるなら話が変わる

「なので、陣形は中心に龍二さまを

後方に私の隊を置いて左右に高覧さんと、悠さんで良いかと思えます」

「いや、俺は前線にでるよ」

「そ、そんな？！危険ですよ！」

「危険は承知さ、でも俺が出れば士気は上がる。

何より後方で帰りを待つのは、しょうに合わないしね」

そう、俺は生まれてからずっと戦いの時は前線にでている。

「死ぬ可能性だってある、重傷になる時だってある。

でも俺は死んだ人も、殺してしまった人達も、最後は同じだと思っ

その”想い”を背負ってこの時代を平和に導きたいんだよ。

だから、後悔しないように前線で戦うんだ。」

これは、この世界に来て最初に決めた事だ

死んでしまった人は後悔も、悔しさも、満足もしただろう。

殺してしまった人達も本来なら只の農民や、父であり母であり、息

子や娘だったろう。

それら全てを背負って家族を、友人を、民を守ると。

「だから大将は琥珀で」

「え”、私でしか？！」

「中心に琥珀を

左右を俺と高覧でどうだろう」

「?...あの、私は？」

「悠は...」

S i d e 盗賊頭

「ふんつ、奴等も不甲斐ないね」

今眼の前は戦いの…いや、一方的な戦いの真っ直中だ。

敵と当たった瞬間回りの奴等は総崩れを始めた。

無謀にも戦いに向う奴や、恐れをなして逃げる者。

正に雑兵としか言い様がない

「そろそろ当たるか…」

お前ら！気合いをいらくバーン！バーン！>ツ！なんだ！

「頭！後ろから奇襲でさあ！」

「くっ！」

（やってくれる…、このアタシに奇襲だなんて）

アタシは羌族と良く戦っていた。

だから奇襲はアタシの十八番だったのだ。

「味な事してくれるじゃないのさ。」

お前ら！方陣形成ののち、正面の奴等にぶち当たるよ！」

「ハッ！」

最後の戦、楽しませて貰うよ！

S i d e 盗賊頭 e n d

S i d e 悠

「ハア！！！」

私は昨日言われた通り、背後から奇襲を仕掛けた。

それは今、大成功に終わったのだ。

（流石龍二さま、適材適所ですね）

私は背後から責め、向ってくる敵を倒していた。

（死んだら皆同じ…か）

龍二さまが前線で戦うと聞いて正直、正気かと思った。

普通君主などは危険な戦地などいかない

ましてや最前線なら、尚更に

しかしそんな思いは吹き飛んだ

あの人は言った。

死んだ人の想いも背負って戦うと

私は心が震えた、之が王の才覚なのかと

いずれこの荒んだ世界を、救ってくれるんじゃないかと

だから私は

向ってきた敵を愛剣で突き刺す

「フツ！」

自分の愛剣は切るのには向かない形状をしている

その分、軽いので刺突が早いのだ。

今、できる事を！

「精一杯やるだけ！

ハアアア！」

そう叫びながら

こちらに切り付けてきた剣を、自分の剣で逸らし

ガラ空きになつた脇に突き刺す

「せいっ！」

「グハア！」

「張部隊止るな！前身せよ！」

「ハッ！」

Side end

次々に向ってくる敵を

時には斬り、時には刺し、時には投げて

見つけた。

「やっと見つけた

アンタがこの盗賊達の親玉でいいかな？」

「…そうだとしたら？」

「悪いけど、倒さして貰うよ」

「フンツ！やれるもんならやってみなよ！」

そう言うのと、相手の獲物の三つ又槍が襲ってきた。

「くっ！」

それを半身で躲し、槍を伸ばした状態の隙について攻撃をする

「あまい！」

「な？！」

しかし相手は躲した槍を直ぐさま地面に刺し

それを軸に蹴りをしてきた。

それを受け止め、一旦離れる事にした

「ハアハア…アンタ強いな、名前は？」

「アタシの名前は麴義だ、アンタは？」

（な？！麴義だつて？）

「…俺は袁 魄麒だ」

「へえ・・・あの噂の袁悠殿だったのかい」

俺は内心焦りまくりだ。

なんせ相手は袁紹のピンチを助けたほどの猛将だったからだ

（くそっ、盗賊になつてるなんて聞いてないぞ！）

「俺も知ってるよ、元韓馥の配下で

羌族の戦法を覚えた猛将だろ？」

「?!、知つてんのかい」

そう言った麴義は苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。

「そんなこともあつたさ。

でも今はしがない盗賊頭…

もう信条もなにもない。

だから最後に強い奴と戦えて嬉しいよ！」

そう言うのと、槍を横薙払ってきた。

それをしゃがんで躲しながら、気になった事を聞いた

「最後？…まさか」

「関係ないとはいえ、アタシの部下になった奴等が村を襲ってしまった。」

「だから最後は死んで詫びるさ！」

「俺はそれを聞いて」

「久々に…キレた。」

「ふざけんな！」

「っ?！」

「部下がやった事を悔やんで、死んで詫びる？」

「ふざけるのも大概にしろ！」

「そう叫びながら、俺は剣のラツシュをぶちかましていた」

「うぐっ！」

（一撃一撃が重い！）

「そうやって悔やむなら、何故その部下を纏めようとしなかった！」

「何故今の世を、先の世を見ない！」

「俺は鞠義の眼を見つめながら、剣を振っていく。」

「ぐっ！」

（先の世…か、アタシは確かに

今しか見ていなかったのかもしれない）

「鞠義！俺の元にこい！」

「韓馥などの所より、お前を旨く使ってやるから！」

「ぐっ！」

最後に打ち付けた剣で鞠義は武器を落した。

「ハハツ、負けた…か」

「でもこんな清々しい負けは久しぶりだ。」

「…わかった、アンタに着いていくよ」

「そうか…良かった、これからよろしくな」

「真名は龍二だ」

「アタシは睦月、よろしくな」

睦月は空を見上げながら

「そしてその手は攻撃を防いでたせいかわからないが、」



**第肆話 未来に向けて、人材確保 後編（後書き）**

皆さんども

梅干しです

いや〜今回はちよいとシリアス？風味を出してみました  
龍二の想いを表現出来てるか不安です

では、さて次回！

## 第五話 力の象徴、その名前は

盗賊退治を終えてから数日がたっていた。

これは、そんな久方ぶりの平和のページ

『力の象徴、その名前は』

「ハアア！」

「フンツ！」

ガキツ！

今俺は、睦月や高覧達と訓練の最中だ。

アレから数日たち、当初はいろいろ揉めたが

今は何とか普通に過ごせている

「ハアハア…、流石高覧だな」

「いやいや、龍二殿こそ…。」

高覧は、正に見たまんまの武器を使っている。

身長は俺より頭一つ分デカく、髪型も特に気にしてない様で雑に切った黒い短い髪型だ。

そして体格に合わせた様な大剣を持っている。

無駄な装飾も無く、武骨ながらも破壊力は抜群の一品

(ここはやはり…)

俺は一瞬で考え、足に氣を溜めて移動を開始した。

S i d e 高覧

俺は久しぶりに燃えていた。

(やはり…強い！)

普通なら俺の武器、「剛咒牙・ゴウシュウガ」を受けると相手は

吹き飛ばすか、武器を破壊出来る筈だった。

しかし、龍二殿は避けもせず受け止めたのだ。

(武器が壊れないのは…「氣を纏わせてるのか」)

つい最近知ったのだが、龍二殿は自分の愛剣が無いらしい。

そう、今使ってるのは一般の兵達が使ってるのと同じなんだそうだ。

(それであの堅さか…)

何でも、袁家には家宝の剣があるらしいが

妹の袁紹殿に渡しているそうだ。

もつたいない気がするのは俺だけじゃない筈だ

この一瞬の小さな隙に、龍二殿は目の前から消えたのだった。

(なっ?!)

普段から身に着けている蒼い鎧の残像を残しながら

それは正に麒麟の様に

蒼く駆ける聳孤の様に

(おいおい…、本当かよ)

俺はこの時、本当に使える気になったのかもしれない。

何もかもを置き去る様な、この背中を守る為に

Side 高覧 end

(ハハツ！すげえ！)

俺は今までの様に戦うのをやめて、足に気を為ながら動いていた。

これが初めての筈なのに、思う様に動けたのだ。

(今度からこの訓練もするか)

そんな事を思いながら、速さをくわえた剣の一撃を高覧に叩き込んだ。

バキン！

しかし、耐えきれなかったのか高覧の武器と打ち合った瞬間砕けてしまったのだった。

「いやあ、驚きましたよあの動き」

「ぶつつけ本番だったんだけどな

にしても…どうすっかなあ？」

俺は手元にある”元”剣を見つめながら呟いた。

「粉々ですなあ」

それからわかった事だが、今の動きをすると速さが加わる為に只の剣だと耐えきれないらしい

なので、高覧からも言われ自分の愛剣を作る事になった。

しかし、それが少し問題を起こしてしまった。

例えば

1、とある元自警団の副隊長の場合

「龍二様」

「ん？ああ、ゆー」少しよろしいですか？「お、おう」

「今、ご自分の武器をお探しなんですよね？」

「うん」

「でしたら、コレを」

「ん？コレは…」

そう言つて渡してきたのは、ナツクルガードが付いた青く塗られたサーベルの様な剣だった。

「へえ、悪くないな」

「私が鼻肩にしてる鍛冶屋で作ってもらいました」

少し胸をはりながら、満足そうな顔をしている  
しかし…

「ああ、悪いんだけど少し刃が薄過ぎて俺が使つとせ…」。

だから、すまない」

「…そう…ですか、わかりました」

肩を下げ、シヨンボリしながら去ってしまった。

(「う、心苦しい…」)

2、とあるおチビ軍師の場合

「わ、私はおチビじゃないですっ!」

「い、いきなりどうしたんだ?」

「な、何でもないです!」

「そうか、んでここでいいのか?」

「はい!」

先程呼ばれたので武器庫に来たら、琥k「あれです!」…とりあえず見て欲しいらしい

そして今それを見た訳だが…

「すまん、無理だ」

「ええ?!」

今日の前にあるのは、刃渡りが数十もある様な大剣とも言えない”巨”剣だった。

刃も分厚く、斬るより叩く方が正しい言い方だと思っ

「確かに頑丈だろうが…、コレは持てんな」

「駄目…、ですか?」

「う”…、ああ〜スマン」

「わ、わかりました!わざわざすみませんでした!」

「い、いや大丈夫だよ」

そう言って走って行ったが、顔は泣きそうだった。

(痛い!心があ〜!)

3、とある名家の妹

「龍二お兄様！」

「麗羽か、どうした？」

「こちらをお使い下さいまし！」

そう言つて渡してきたのは、装飾でゴテゴテした  
ほぼ観賞様にしか見えない剣だった

「麗羽」

「なんですか？」

「コレならお兄様に合いますわよ」

信じきっているその笑顔を曇らしたくはないが…

「すまないが、これは戦闘には使えないよ」

「お兄様なら大丈夫ですわ！」

「いやあ…」

それから、数時間をかけて説得をし  
なんとか承諾をしてもらった。

最後の

「わかりましたわ…」

そう去つて行つたあの背中を俺は忘れられなかった。

（精神的に死ぬ…）

閑話休題

そんなこんなで、精神的に参っている俺は

今日、貢ぎ物をチエックしていた。

一応家は名家で、尚且つ太守なので

回りの村から贈られてくるのだ。

その中で一つ気になる者があつた

「…こんな石、どうしると？」

目録によるとなんでも凄く堅く、何かに使つて欲しいそうだ。

（堅いのか…、量もまあまあだから武具でも作るか？）

「ふーむ」

そんな事を考えながら謎の石の欠片を手で遊んでいると

「ん？、なんだ？」

たまたま氣を腕に這わせた所、それに反応して蒼白く光り出したのだ。

「これは…、使えるな」

直ぐさまそれを使い武器を作る事にし、鍛冶屋を手配した。

そして

「できたんですかい？」

「おう！見てくれよ高覧」

俺は等々できた自分の愛剣を鞘から出し、高覧に見せた。

その剣は、鏢から中心に2匹龍が登る様な模様がある以外、至ってシンプルだった。

しかし、見るものが見ると名剣なのは見て取れる

「なるほど…いい剣ですな、んで名前は？」

「そうだろ？名前はな…」

未来を明かるく照らしてほしい

家族を守る力になってほしい

そんな意味を込めて

「蒼光護剣…だ」

第五話 力の象徴、その名前は（後書き）

皆さんども

梅干しです

今回は平和な感じを出したかったんですが・・・正直微妙かなあ  
後は剣の名前とか

うゝむ・・・

とりあえず次回頑張りたいです

では、次回

あつ感想お待ちしております

## 第陸話 契り、その名は奔走の友 前編

「アイツだけが信じてくれた」

「回りの言葉も否定して、只一人信じてくれた」

「だったら????、今度は俺がアイツを助ける番だ」

『契り、その名は奔走の友 前編』

俺には小さい頃からお世話になつてる兄貴分がいる。

その名は許攸 子遠

袁家が滅んだ切っ掛けを作る一人だ。

その為、はじめの頃は注意してみたが何ら変なことはなかった。

要は酒が好きだけで、誰しも飲み過ぎれば二日酔いになる

そうすれば生活だつて乱れるだろう。

飽きる事の無い探求心、言い方を悪くすればそれは貪欲で欲深だろう。

しかし彼は軍師だ。

何ら悪い事など無い。

(貪婪淫蕩で貪欲…ね)

これは、結局過去の知識でしかなかったみたいだ。

実際に見て、会話して、回りの環境をみたらここまで良い軍師はいないだろう

尚且つ、彼は武将なみな強さだ。

だから俺は言ったんだ。

「なあ許攸、俺の兄貴分になつてくれないか？」

最近視線を感じる。

可愛い女の子が俺を見てるならいいが、この視線を送ってくる奴は俺を監視????いや”観察”している様だ。

(ま、なんら困る事はありませんがね〜と)

なので、いつもどおり生活をしていた。

一応軍師なので、政務を適当にやり

うちの天才チビッコが書いた書を読み

「最近の若い者はすげえなあ」などと驚きながらも

自分の知識と合わせ新しい事を考えたり

就寝前に酒を飲み、二日酔いで寝坊する…

そんな日々だ。

やはりというか、回りの評判はよろしくない、だがこれが性分だ。

何よりこれをわかって袁成殿は俺を使ってくれている

それは何よりも感謝をしていた。

しかし、今回はこれを後悔する事になる

自分が招いた事とはいえ、まさかあんな事になるなんて…

思いもしなかった。

Side 許攸end

それは突然だった

朝早く、軍議をしていると

突然兵が部屋に入り込んできた。

話しを聞くと、なんでも町で騒ぎがあり駆けけると人が死んでいたらしい。

そして刺した人物を捕縛したと、そういう事だった

連れて来られた人物を見て、知ってる者は驚いた。

それは????許攸の妻だったから。

S i d e 許攸

俺は慌てていた。

朝、いつもの如く寝坊をして

今日は軍義があつたのを思いだし、

遅れて今から行こうとした所に、兵がきて報告をしてきたのだ。

俺の妻が人を刺したと、そして今その罪を決めていると

それから無我夢中に走り部屋に入ると、ちょうど罪が決っていた

それは

死罪

もちろん俺は抗議した

「待ってくれ！妻は確かに人を刺した！

しかしその理由は自分の子供を守つた為だ！死罪は流石に重過ぎる

！」

「あら、そんなことはありませんよ」

そういつてきたのは、机の中央から右側に座る同僚

逢 元凶だった。

「…どういう事だ」

「調べた所、貴方の奥様は元賊ですつてね？」

確かに、俺の妻は元賊でたまたま怪我をしてるのを助けてからの

仲だ。

「確かにそうだ…

だが今は何もしてないし、家で家事をするぐらいだ」

「ふふ…、どうかしらね？」

貴方がいない間に罪を犯してない証拠はあるの？」

「っ…、そんなものはない…しかし！

俺はアイツを信じている！」

「ふんっ！信頼？貴方には似合いませんね」

気にくわなそうに喋り出したのは、逢紀の前に座っていた審 正  
南だった。

「審配：お前もか」

「心外ですね、私は一度も貴方を庇護する事など言ってませんよ」  
そう言う奴の顔と、逢紀の顔は冷めきっていた。

俺は、きつと情けない顔をしていたらう。助けを求める様に、他の文官などをみだが皆、眼を逸すだけだった。

（ああ…：そうか、俺はここまで嫌われていたのか）  
確かに許攸は頭が良く、軍師をしていたが

他の同僚達や文官には余り好かれていなかったのだ  
理由は言わずと知れたその態度

同僚達はこんな奴が軍師なんて…と  
文官達はあんな頭だけの奴に…と

その事を初めて知ったのだった。

「わかったかしら？」

貴方の様な方の家族ですもの、見過ごせる訳ないでしょう？」  
俺は目の前が暗くなった。

自分のせいで家族を殺してしまうのと同じだから

（すまない…：俺にはどうする事もできないかもしれん）  
俺は諦めかけていた

しかし

「その案件待ってもらおう」

天は俺を見放さなかったらしい

Side 許攸end

朝早くの軍議の時、そんな事を聞き

中断してから、俺は母上に報告しに向っていた

（おかしい…、確かこの事件は官渡の戦い直前あたりだったはずだ。  
…これも俺のせいかな？）

本来いる筈のない『袁悠 魄麒』という人物

このせいで、問題がでるとは思っていた  
それがこんなに早まるとは思わなかったが。  
(とりあえず、どうにかしないと)

そして、部屋に着き入ると母上は寝ていた。母上は少し前から病を  
患い床に伏せているのだ

「母上、すみません緊急です起きて下さい」

そうすると緩やかに、瞼をあけ見慣れた紅い眼をこちらに向けた。

「龍二…、どうしたのかしら？」

「実は…」

俺は朝起こった事を事細かに話した

「そう…、龍二はどうしたいのかしら？」

「俺は…俺は、許攸殿を助けたいです」

最近観察して、彼は袁家に必要な人間だと思ったのだ。

そう言つと、母上は嬉しそうに笑い

「なら、貴方のやりたい様にやりなさい

なにか問題が起きても私が責任を取ります」

笑いながらも、力強く言つたのだった。

それから俺は急いで部屋に戻ってきた

そこから聞こえてきたのは…

「貴方の様な方の家族ですもの、見過ごせる訳ないでしょう？」

そんな声だった。

だから俺は声を張り上げ言ったんだ。

「その案件待ってもらおう」

これから俺は、孤軍奮闘する一人の軍師…いや、家族を助けに向う

第陸話 契り、その名は奔走の友 前編（後書き）

皆さんども

梅干しです

今回はシリアスにしてみました

いかがだったでしょうか？

許攸さんは実際はもっと酷かったと思いますWW

では、さて次回！

## 第漆話 契り、その名は奔走の友 後編

一人きりの戦いだっただ。

回りは助けもせず、目も向けていなかった。なら俺が助けよう  
この世界で、初めての心友だから

『契り、その名は奔走の友 後編』

俺が部屋に入ると、文官達は焦った様に。

審配は、少し挙動不審に  
逢紀は

「あら？如何なさいましたか袁悠様？」

何ごとも無く話しかけてきた。

「如何もなにも、なぜ勝手にこんな事をしている？」

本来こうだった場合は、太守でありこの城の主である母上に報告を  
しなければならぬ。

なのに勝手に罪を決め、尚且つ民を裁くのはあつてはならなかった。

「これは異なことを

我らが主は床に伏せていきましょう？」

ならばこんな事で御足労かける必要はありませんわ」

「こんな事…ね」

「ええ、些細な事ですわ」

俺はこれを聞いて、呆れしかでてこなかった。

「そうか、なら逢紀殿

後は俺がやっておくからここはもういいよ」

「いえいえ、袁悠様の手を煩わせる訳にはい」だまれ「ッ?!」

俺は少し殺気をいれながら言う

回りは顔を青くしていた。

「なら、貴女どうだ？」

何の資格もない、” たかが” 軍師の貴女が  
守るべき民を勝手に裁き、その家族の訴えも聞かない  
しかも自分の主に報告もしていない

「そつ、それは後程」後じゃ意味がないだろう？  
何故なら決めた罪は何だったかな？

そう、それは死罪だ

死人に口無し…だが？」

「くっ！」

しかし！許攸殿の家族ですよ?!」

「そ、そうですぞ！」

「それに元賊です、今後なにをするかわかりません」

それを聞き、許攸は悔しそうな顔していた。これをおろそかに、  
一斉に騒ぎ出す文官達

…俺は静かに、手に氣を為、机に叩き付けた。  
バツン！！

辺りに轟音が響き

衝撃で机が壊れたが気にせず言った。

「元賊だからなんだ

生活が乱れているからなんだ

お前らは何故彼の内側を見ない？」

静かに怒りながら言うすると、少し青い顔をしながらも  
逢紀が喋りだす

「内側？」

そんなもの、この不純な輩にありませんわ！」

それは、逢紀の胸の内だったのだろう

許攸を庇護する俺に、睨みながら言うのだ。

しかし俺は…

「そんな事も分からないから、筆頭軍師になれないんだよ逢紀殿  
彼は、確かに生活が乱れている

それは酒を飲んだりしてるからだ

しかし、その理由は？」

「そんなもの、只好きだから「ちがう」に……」

「それも、まああるだろうが彼は毎晩商人達と飲み

今の世の現状、他国の状勢、物資の経路

いろいろな事を聞いているからだ。

商人は渡り歩く、だからその知識は必要なものだ

貴女は今までなにをしていたのかな？」

「わ、私どもにはm「それは筆頭軍師である荀イク殿がしている

貴女には関係ない筈だが？」くっ……」

次々に反論し、論破していく

逢紀は悔しそうな顔しかできていなかった。

俺は再び回りを見渡し、何も言ってこないのを確認してから

「反論は無い様なので私が決議する

許攸殿又その家族には罪はない

直ちに牢からだし、家に帰して差し上げる」

「ハッ！」

「文官含め君達には厳重注意をしておく」

「……は、はい……」

「わ、かりました」

そして俺は許攸を見て

「許攸、奥さんに会いに行こう」

「はっはい！」

そう言っつて、許攸を連立つて部屋からでたのだった

それから無事奥さんは釈放され

子供と家に帰った

その時に初めて会い

今回の事で謝罪をしたら、ひたすら逆に謝られてしまった。  
そして今俺達は…

「良かったな、許攸」

「ハッ！」

この度は誠にありがとうございました」

「うーん、今回は何も悪くないからなあ…」

「いえ、妻は人を殺めましたから…」

「自分の家族を守る為だろ？」

俺だって同じ事をするさ」

「そう…ですか」

そんな会話をしながら、城壁から夕日を見ていた。

この世界にきて、こんなにも美しい夕日を見たのは初めてかもしれない

それは、いろいろな事を決心したせいもあるだろう。

だから、ここでフツと思い出した

許攸や袁紹は確か契りを交わした筈だ。

だから俺は許攸に言ったのだ

「なあ、許攸

俺の兄貴分になってくれないか？」

「は？」

そう言われた許攸の顔をいつまでも忘れないだろう

「契りだよ

いい機会だ、これから俺に賭けてみないか？」

「くっ、くっ…貴方は面白い方だ」

「アンタの方が年上だろ？」

親しい奴の中なら、呼び捨てでいいよ」

「そうか？なら、そうさしてもらおう

しかし、契り…ねいいのか？俺で」

「かまわん

今の袁家は野心がある奴が多い、妹もまだ幼いし

いつ寝首を欠かれるか分からんしな。

なら、アンタみたいなのでも信じれるなら部下にほしい」  
「くくつ、そうかい」

俺には断る理由は一切ない  
もちろん受けるぜ」

俺達は握手をして、夕日に誓う様に宣言をする

「我が名は、姓が袁、名は悠、字が魄麟、真名が龍二なり」

俺は声を高らかに

「我が名は、姓が許、名が攸、字が子遠、真名が柳なり」

許攸、いや柳は誇らしげに声を張り

「「我らは誓う、この夕日にかけて。」

我が友が窮地に陥った時、何をおいても駆付けると。

そして、何をおいてもその背中を守ると。

我らは誓う、今この時から義兄弟なり

我ら”奔走の友”なり！」

こうして物語は始まる

それは正に絆の誓い

なにがあっても守るべき、心友の誓い

第漆話 契り、その名は奔走の友 後編（後書き）

皆さんども

梅干しです

如何だったでしょうか？

柳との誓いは始めから考えてましたが

そこに至るまでにここまで悩むとは思わなかった・・・

一応今回は田豊や張郊と会う前と考えてください

ちなみに補足として、審配や逢紀などは始めからいた設定です

次回はそろそろあの人を出したいかなあ・・・

では、また次回に！

## 第捌話 初めてのキモチ、生涯の相手

「始めは気にもとめていなかった」

「でも、あの時助けてもらって」

「だから私は」

『初めてのキモチ、生涯の相手』

「断？固？反？対です！」

盗賊被害がでていた村に行き、部下を数人仲間にできたので城に帰り信用できる者を集めて報告していた時だった。

許攸：柳に、後二人

今反対をしたのがその内の一人、名前は…

「そんな事言われてもなあ…、信用できる奴等なんだよ」

「そうだけ龍二もこう言ってたから、大丈夫だろ」

「アンタは黙ってなさい！龍二様！龍二様の軍師は私一人だけで十分です！」

それとも…、私ではお嫌です…か？」

「そんな事ないって！只、一人だけだと何かあった時に大変だろ？」

「これでも”桂花”を心配してるんだ」

「龍二様あ…」

そう、今目の前で

手を胸の前で合わせながら上目遣いをしつつ、こちらを見ている人物

かの有名な曹操に使え、王を支えるに等しいと言われ

「王佐の才」と謳われた。

後世にも名が残る、荀イク 文若その人だった…

S i d e 桂 花

この間、救援の文が届き龍二様が向った。  
私も行こうと思ったけど、「城を見ていてほしい」と言われたので  
張り切って仕事をしてたわ。

まあ、これが間違いだったみたいだけど…

やっと帰ってきたと思ったら、人数が増えていた…

龍二様に腹心ができるのはいい事なんだけど…

（それにしても、不思議なものね…、私がこ、ここまで男…の人を  
好きになるなんて）

私は昔から男性が苦手だった。

小さい頃など、知らない男の人には話もできなかつたらしい

今でこそ、苦手程度には良くなっていたが。

でも、事件は起こった。

それは龍二様と仲良くなれた事でもあつたけど…

S i d e 桂 花 e n d

数日前

S i d e 桂 花

今日は夜間の数日に渡る集団調練の日だった。

特に、今回は袁悠殿の隊が参加するらしく

皆やる気になっていた。

「麒麟児…ね、その能力を見させていたどうかしらね」

その中で、私は新人を纏めて隊を作り

遊撃の指揮をしていた

「さっさと陣を敷きなさい！、私は新人だからって甘くみないわよ

」！

「ハッ！」

「ハッ！」

その内の何人かは、袁悠殿が元山賊などでも採用すると聞き来て尚且つ考えが甘い連中で嫌々従ってるのが見え見えだった。

「その！、やる気が無いなら辞めなさい！」

面白半分で来られても私が迷惑よ！

家に帰って無い頭でも使いながら、汚らしい事でも考えてなさい  
！」

「ハッ！」

「フンツ！まったく、こんな連中を採用するなんてどうかしてるわ」

そんな風に文句を言っていた。

それから、五日程たっていた。

「くっ、流石麒麟児って所かしらね…」

親指の爪を噛みながら呟いた

私はここまで追い詰められるのは初めてだった。

こちらは新人とはいえ、2000人

しかしあちらは訓練した兵達だが500人しかいなかった。

それでも覆せなかった。

特には500人全員で、特には半分に分けて前と後ろから。

特には300人で守り精鋭100人による横撃だったり、その攻め方は多種多様だったのだ。

そのせいで、私の兵達は疲労困憊で

神経を磨り減らしていた。

しかし極限状態になると、人の性格がわかる様で

始めの頃使えると思った者が実は偽りの性格だったり、我先にと逃げる様な奴だったり

使えないと思っていた者はこの状況に慣れ、今では小隊を指揮でき

るまで成長をしていり

(このやり方は極端だけど、悪くない…)

私は、ブツブツ言いながら

少し休憩しに、近くにある小川に向った。

今思えば、これが私の運命の分かれ道だった様だ

「フウ…、冷たくて気持ち良いわね」

考えすぎて熱くなった頭を冷やす様に、川の近くに腰掛け手をつけていた。

ポーっと手と足を川につけながら、夜空に浮かぶ満月を見上げていると後ろから音が聞こえた。

振り向いたその先には

「へへっ、やっと見つけたぜ」

「まったく、てこずらせやがって」

始めの頃、嫌々従っていた新兵数人が

目を血走らせ

ある人物は下品な笑みを浮かべながら

ある人物は凶器をちらつかせながら

こちらに近付いていた。

「ひっ！ち、近寄らないでよ！」

その異常な雰囲気飲まれ、逃げる事もできなかった。

「きっ、汚い手で触らないで！」

男達はニヤニヤと、嫌らしい笑みを浮かべ手を掴む

「やめっ！キヤアア！」そして私は地に無理矢理寝かされ、衣服をはぎ取られていった。

Side 桂花end

今俺達は、集団調練の最中だ。

しかも俺が鍛えた兵500人も参加した。

今回は夜間のみで、数日に渡り訓練をする

昼間は攻撃は禁止で、日が暮れてから開始され

ルールは、数日生き残るか、敵の大將を打ち取る事

ちなみに今回はかの有名な荀イク殿が敵さんの大將だ。

こっちはもちろん俺…、では無い

実は、前に自分の隊を作るので新兵達を見ていたら

動きが良いのがいたので引き抜いてみた。

そして名前を聞いたらびつくりだ

「かの有名な袁悠様に声をかけていただいて、わ、私は天にも登れ  
そうです！」

あの！私は姓が淳于、名が瓊、字が仲簡と申します！真名は浮華で  
し！」

そう、これまた官渡の戦いで被害を被った人達の一人だった。

それこそ、ホントにいずれ天に逝ってしまうかもしれないので

俺は彼女を鍛えた。

今では俺の隊の副隊長をして貰っている

なので今回は良い機会なので彼女を大將にしたのだ。

「龍二様、次はどうしますか？」

浮華は、目を逸らしながらそう聞いてきた。

始めの頃は、話しかけただけで慌てていたが

今では話してこれる様になった。

只、目は合わせられないらしい

前に試しに顔を両手で挟み真正面から見てみた。

すると面白い様に顔が赤くなり始め

マンガの様に頭から湯気を上げて、目をグルグル回しながら気絶し

てしまった。

それから三日程は姿をみただけで逃げ出していたが…

閑話休題

「そうだなあ、そろそろ新兵達もいいてきになってるだろうから

仕上げるかな」

「なら最後は真正面から当たりますか？」

「そうするかね申し訳ないが、新兵達には世の辛さを見ていただきますか」

「ふふつ、そうですね。では私は他の部下に説明してきます

龍二様はいかがしますか？」

「俺はさつき見つけた小川に行つてくるわ

多分それから寝るだろうから、朝飯ぐらいに起こしてもらえるか？」

「ええ、わかりました。では失礼いたします」

そう言つて、後ろ髪数本を束ねて後頭部辺りでとめ

腰程まである美しい銀に近い頭髪を踊らせながら歩いていった。

そして、俺はさつき言つた小川に向つていた。

ちよと敵さんの偵察にきた時には見つけたのだ

そろそろ着くので、今日は満月だから良い月見ができると期待しながら歩いていたら

「やめ！キヤアア！」

川の向こう岸で悲鳴が聞こえた。

回りは薄暗く、向こう岸まではちゃんと見渡せなかった

しかし辛うじて、5人程が回りに立ち

1人が地面に1人を押し倒していた。

この時、俺は死ぬ直前を思い出した

強盗に服を破られる北条さん

それを助け、隙を見せ刺される俺

きつとあの時泣いていたのは北条さんだ。

俺は、北条さんの心までは助けられなかった。

だからもう、そんな光景は見たくなかった

だから俺は川にある岩を飛び移り

押し倒している奴を

前世の様に

「お前ら、何してんだあ！」

蹴りあげた

俺は、今この世界で、あの時の再現をする  
今度は相手も、自分も守る様に

Side 桂花

服を破られ、汚い手が私の身体を触る

私は、悲鳴もあげる事ができず

キツく目をつぶりながら手足を動かさず暴れた。

「チツ、暴れるんじゃねえ！」

男は暴れる私に痺れを切らせたのか、手を振りかぶり殴ろうとしてくる

(怖い…こんな時に私は何もできない！)

怖さで動けずにいると

「お前ら、何してんだあ！」

声が聞こえて、身体が軽くなった。

私はゆっくり目を開く

そこには、夜空に浮かぶ満月にも負けない程の金髪をしている

広く、大きい背中が目の前にあった。

私は、生涯この背中を忘れないと誓った。

今、目の前で踊る様に戦い

私を守る背中を…

この空に浮かぶ、満月に誓って

Side 桂花 end

俺は、回りにいた奴を

時に足を折り、手を折り

特に覆い被さっていた奴は両手足をへし折ってやった。

そして片付け終わり後ろを向くと

そこにいたのは…

ビクツと身体を震わせながら

目が潤み、服もズタズタになり

地面に押し倒されたので泥だらけになった…

荀イク殿だった。

とりあえず俺は羽織っていた上着を脱ぎ、渡した

「とりあえず、これを」

「あり…がと、う」

震えながらそれをきて、気が緩んだのか声を上げずに泣き出してしまった。

「…ひつく、うう…ひつく…」

そんな姿を見たからだろう

柄にもなく

余り話した事もない彼女を俺はキツく抱き締めた。

「もう…大丈夫だから…安心していい、俺が守ったから

辛いんだから声を上げて、心から泣い方がいい」

荀イク殿は抱き締めた瞬間、大きく身体をビクつかせ身体を堅くした。

俺は、彼女の悲しみが無くなる様に

キツく、キツく、抱き締めた。

彼女は徐々に身体を柔らかくさせ…

大きい声を上げて、泣き出したのだった。

やっと泣きやみ、安堵したのだろうか

疲れて眠ってしまった。  
しょうがないので自分の陣にお姫様抱つこで連れて行った  
そしてすぐに浮華を呼び、先程の事を話して川に転がせた屑の回収  
をしてもらった。

ちなみにその時、浮華の視線が怖かったのを伝えておく…

閑話休題

それからは大変だった。

直ぐに調練をやめ、城に帰った

荀イク殿も落ち着いたが、一つ問題が起こった。

やはり多少恐怖が残っている様で、夜になると眠れないらしい  
なので最近俺の部屋にきては  
一緒に寝る様になってしまった。

そこでまた違う問題が出るが、割愛させてほしい…

おまけ

「袁悠殿、いいえ袁悠様

あの時は本当にありがとうございます。」

「いや、無事で何よりだよ」

「こんな事では足りないかもしれないかもしれませんが、私の名前を受け取って  
下さいませ

私の名前は姓が荀、名がイク、字が文若です

真名を桂花と申しますわ」

「そっか、俺は姓が袁、名が悠、字が魄麒だ

真名は龍二ね、よろしくな」

「はい！私の身も、心も、貴方様に捧げますわ」

「は？」

「もう私は龍二様無しには生きられません！」

「ちよ？！お、落ち着くんだ桂花！」  
「はぁん…、名前を呼んで頂けるなんて…」  
「紅い顔して近付かないで?!」  
「我慢などなさらないで…」  
「おまつ、脱ぐなぁあ！」  
「お待ちになつてえ、龍二様ぁあ！」  
「どうしてこうなったぁああ！」

第捌話 初めてのキモチ、生涯の相手（後書き）

皆さんども

梅干しです

いかがだったでしょうか？

今回から感想にも頂いたので、改行をさらに気にしてやってきましてが何故かできないorz

なので救命措置で で代用しました

多少は見やすくなってますでしょうか？

これ以上は俺には無理っす！

すいません！

ちなみに今回の桂花ですが

華琳にあつてなければデレる筈！

をコンセプトに作られてます

気に入らなかつたら申し訳ないです

しかし家の桂花は主人公クラブです！

すいません！

では、さて次回〜

祝 PV100・000 ユニーク10・000ヒット記念 作者と出演者の対

この話しは、本編とまったく関係ありません

また、今回は名前「」という形式をとりますのであしからず

お城の何処か

梅干し&amp;龍二「祝!PV10万&amp;ユニーク1万  
ヒット

ありがとうございます!」

梅干し(以降、梅)「いや、まさかここまでいくとは??」

龍二(以降、龍)「まあ、恋姫のブランド力だろうが驚きだな」

梅「試行錯誤しながらやってます」

龍「馬鹿だからな(笑)」

梅「改行とかやり方ワカンネエ!」

龍「馬鹿だからな(泣)」

梅「何なのさつきからお前!」

龍「俺の溢れる気持ちを表現してみた」

梅「やめてくれ!」

龍「ではゲストを及びします」

梅「えっスルーですか?」

龍「きました我らの純情娘!

たまに見せる笑顔がステキ!

クールビューティな初なやつ!

淳于瓊改め、浮華さんです!」

浮華(以降、浮)「///」

梅「顔が真っ赤ですが」

龍「ふふつ、どうしたんだ?

お前の可愛い顔を良く見せてくれ」

龍二、徐に顔を掴む

浮「あつあの!//その!//」

梅「アレ?スルーの上に何この雰囲気?!

つつかお前本編とキャラ違くないか?!」

龍「さあ、浮華の可愛い所をもっと見せてくれ???」

浮「／／は???い／／」

段々顔が近付く二人、そして

梅「見せられないよ!

つつか目の前でイチャつくなよ

ちきしょーおおお!」

空しさの余り逃げ出す作者

梅「うう???、いいんだどうせ俺なんて???」

麗羽（以降、麗）「あら?梅干しさんではありませんの」

梅「ああ???麗羽か???」

麗「なんですその「こいつがきやがった???」みたいな溜め息は」

梅「ソナナコトナイヨ!」

麗「片言ですわ

まあ、これでも飲んで元気を出しなさいな」

そう言つて手頃なサイズの壺を渡す

梅「これは?」

麗「今日届いた献上品の中に

いくつかありましたわ」

梅「ふん???」

蓋を開ける作者

キュポン!

梅「ん?この匂い???酒か?」

少し飲む作者

梅「ゲフォ?!ゴホツゴホツ!」

麗「あら?どうしたんですの?」

梅「ど、どうしたもこうしたも???なんつつ強い酒だよこれ??

「？」

麗「そうですねの？私は平気ですわ」

梅「そうですか？？ん？

待てよ？？？なあ麗羽さんよ

この酒龍二に渡さなかつたか？」

麗「お兄様にですか？」

もちろん渡しましたわ！」

梅「貴様のせいかなぁあ！」

徐々に暗くなる画面& a m p ;エンディングロール

改めて皆さんありがとうございます

今回は最初からふざけてみましたw

たまにはいいかなと

これからもよろしくお願いします〜

おまけ

麗「所で梅干しさん？」

梅「ん？なによ」

麗「いつ私は活躍するんですの？」

梅「????????」

麗「????????」

梅「????????」

麗「?????なんですか？」

梅「え、ほしいの？」

麗「当たり前ですわ！」

梅「だって麗羽って

原作も他の方の小説でも濃いだる馬鹿なの？」

麗「ばっ！私だって袁家の一員ですわ！

華琳さんにも負けない知力（笑）と

お兄様に教えていただいたいた武術（爆）がありますわ！」

梅「え、なにそれ怖い」

麗「ちよつとおお！」

梅「では、また次回！」

麗「納得できm（ry」

第玖話 暗雲を招く城郭、操られし道化 前編

「家族を守る為だった」

「逆らえない命令だった」

「弱い私は何もできなくて??？」

「従う事しかできなくて??？」

「それでもあの方は??？」

『暗雲を招く城郭、操られし道化 前編』

今日も変わらず、平和な日常の筈だった。

でも俺は、この長い一日の中で

物語が進んでる事を再確認したんだ。

「シッ！」

悠が自分の愛剣で、素早い刺突を何度も繰り返してくる。

それを最近マスターしつつある、氣を足に集めて避ける

「ハアア！」

しかし、避けた方には既に振りかぶっている高覧がいた。

「くっ！」

俺は直ぐさま自分の剣で受け流す様に剣を交える

すると、僅かな隙が生まれてしまった。

「横が隙だらけですよ？」

やはりそれを見過ごす事なく、悠が渾身の突きを繰り出した???

そのせいで見えなかったのだろうか

俺がニヤついたので。

「え?! ちょ?! つて

ふわあああ?!」

「うおお?!」

俺は、高覧と交えていた剣を力無く引き

つんのめった高覧を支えにして、悠の手首を掴んだ  
そして先程とは違い力一杯引つ張り自分の胸に治める。  
赤くなつた顔の悠に「スマン」っと声を掛け???

思い切り高覧に投げ付けた

思わず受け止めた高覧と少し目を回した悠に剣を突き付け

「俺の勝ち???だよな?」

と悪戯が成功した様な笑みをしながら言った。

「(あう)???負けだな(ましたあ)」「

俺は満足な顔をして

「んじゃ今日の調練終わりつと

約束通り、昼をご馳走になるぜ」

と、悪魔の宣告をした。

S i d e ????

「最近奴の勢力が大きくなってきたな???

フン、忌々しい奴よ

逢紀も審配も使えん奴等だ」

私は今、城の調練場で訓練を終えた袁悠を見つめながら呟く  
始めは目障りだとは思いつつも、只の子供とほつておいた。

しかし、奴は成長するにつれその頭角を出してきたのだ。

その時は既に遅く、奴は確固たる地位を築き始めていた

袁家の闇を分かっている様で、奴は自分の回りを固め始めたのだ。

始めに目を付けたのが「許攸 子遠」

奴は確かに普通の軍師らしくなかったが、奴の頭は確かだった。

まあ、回りは気付かない屑ばかりだったが???

次は筆頭軍師の「荀イク 文若」

奴も実力はたしかだった。

しかし、荀イクは男が苦手らしく

城の男達相手にキツイ言い方しかできず、

文官達や兵の一部から嫌煙されていた。

どちらも私は手を打った筈だった

許攸は妻を捕らえて、前々からあった不満をつついてやったら  
バカな文官や逢紀に審配は乗ってきた

荀イクは演習のさいに、仕込んでいた山賊崩れ共を煽り襲う様に仕  
向けた。

???しかし奴は二人の危機を救い、腹心として率いれた。  
だから、私は今回奴自身を狙うことにしたのだ

「そろそろ奴には表舞台から消えてもらうか???おい」

「???はっ」

「???ここに」

「良いか、まずお前は奴を籠絡しろ  
貴様の身体を使い。

その為にいるいる教えてきたんだ。」

「???はい」

「お前はその隙を付き、奴を仕留めろ」

「???はっ」

「良いな、必ず成功させる

???さもないと、貴様らの大事な家族がどうにかなるかも知れん  
ぞ?」

「?????つ、わかりました」

そう告げると奴等は去っていった様だ。

「フンツ、まあ期待はしてないがな???」

精々私の為に働け

そして哀れに踊れ道化達よ???」

Side???end

俺達は町に飯を食べに行き、先程帰ってきた所だった

「ふいゝ旨かったなあ」

「そうですねえ」

「くっ???俺の金が???」結局、悠と高覧がどちらが払うかとなり

ギヤーギヤー言うのでジャンケンを教え、それで勝敗をつけた結果???

「うおお???俺の食費が???」

「うるさいなあ、負けたのが悪いんでしょ!」

御覧の通り高覧が負けたのだった。

ちよつど城に着くと、向こうから小走りで桂花が走って来た

「龍二様あゝ!」

「ん?おお、桂花

どうした?急用か?」

「いえ!たまたまお見掛けしたのでお声をかけました

ご迷惑でしたか?」

「いや、そんな事ないさ

俺達は今飯を食べてきた所です」

そう言うと、桂花は今気付いた様に???

「あら?いたの?

アナタ達に様は無いわ

さっさと行きなさい」

「なっ!貴女にそんな事を言われる筋合いはないわよ!」

「フンツ!私と龍二様の前にいるだけで邪魔よ!」

「うぐぐぐ!」

「うむむむ!」

「あゝ、お前らこんなとく、「アンタ(高覧)は黙って(て)なさ  
い!」「???すいません」

いつの間にか、この二人は仲良く?なっており

華琳と麗羽の様にキーキー喧嘩する様になっていた。

閑話休題

昼間の事も過ぎ去り、今日もまた終わろうとしていた。

俺は久しぶりの風呂から上がり

自分の部屋に帰る途中だった。

「あ”あ”ゝ久々の風呂は良かったなあ

身体を拭くだけだったのも辛いもんがあるからなあ」

やはり、昔の世界なだけあって水道など無い

なので風呂を沸かすのも大変な事なのだ

「いずれ水道を引くかな???

温泉を探すのも悪くないなあ」

そんな事をブツブツ言いながら自分の部屋の前に着く

すると、何故か部屋から人の気配がしたのだ。

（誰かきたのか？

???) いや、アイツらなら部屋に入らず扉の前にいるか

気配を消す様な事はしない筈だ)

そう、今部屋にいる何者かは気配を消していた。

しかしそれは、武官のものでは無く

素人のそれだったのだ

（邪がでるか蛇がでるか???)

俺は、部屋に入った

するとその主は隠れたりせず

俺の部屋にある寝具に腰掛けていた。

暗くて分かりにくいのが、頭に頭巾をしておりそこには動物の耳らし

きものが付いていた

「ん?なんだ???桂花か?

どうしたんだ?まさか???夜這いか?」

俺は少し安堵してか冗談めかして言った

すると???

「そうですよ???

「うお?!」

行きなり桂花?は抱き付いてきたのだ

しかしここで違和感は最高に上がった。

桂花とはなんだかんだで、長い付き合いなのだ。

彼女独特の雰囲気は分かる

しかし彼女は少し違う、そして極め付けは”匂い”

桂花は花の様な、少し甘い匂いがする。

しかし、今抱き付いている彼女は柑橘類の様な匂いだった

そして頭の頭巾は抱き付いた事で目の前にある

桂花は猫の様な頭巾

しかし彼女は???

犬の様なタレ耳をしていた

「桂花じゃない？」

君はいつたい???

「??? 私は荀シン 友若

桂花は私の姉です」

第玖話 暗雲を招く城郭、操られし道化 前編（後書き）

皆さんども

梅干しです

今回は等々袁家の闇の部分を出してみました。

命令した謎の人は誰なのか

それは後々出すつもりです

袁家のメンバーもそろってきたので、そろそろ旅に出る準備と

黄巾辺りに入りたいですね

では、また次回！

第拾話 暗雲を招く城郭、操られし道化 後編（前書き）

注意

今回の話しは、嫌悪感を感じるかもしれない

そう言うのが嫌な方は見ない方がいいかと思われます

また、もしかしたらR15にあたるかも？なんでそちらも注意を

第拾話 暗雲を招く城郭、操られし道化 後編

俺は知らなかった。

ここまで、巢くう闇が深い事に。

『暗雲を招く城郭、操られし道化 後編』

だから俺は、己が傷付いても彼女達を止めたかった。  
救いたかった

いきなり抱き付かれたと思ったら、荀シンだと言う  
更に訳が分からなくなり混乱してしまった。

「あゝ、その荀シン殿がどうしてここに？」

と言つか何故に抱き付きますか？」

「先程も言いましたが、夜這いです」

「?????何故に？」

俺は、申し訳ないが君と話した事もないが？」

そう言つと、胸に押しつけられていた顔が上を向いた。

この近さならわかる

桂花の髪型をクセつ毛にし、色合いは亜麻色を少し濃くした感じで、  
活発そうな彼女に似合っていた。

瞳の色は桂花と違い、薄い緑色をしていた

「姉から貴方様の話しを聞いてました。

楽しそうに、嬉しそうに????

そんな話を聞いてるうちに????好きになってしまいました。」

こちらを見ながら目を潤ませる顔は桂花にそっくりだった。

しかし、違和感があるのだ

まるで仮面を付けてる様な、作られた顔に

ここでやっと冷静になれた。

すると、微かにもう一つの気配を感じる事ができた

「はははっ???そっか???」

(危なかった???冷静になんなきや気付かなかったな???)

「でも???姉から貴方様を取るなんてできません???

だから、せめて私にお慈悲を???

そう言つて脱ごうとする彼女を慌てて止めるが

「ちょ!ま、待て!

そんな事は駄目だ!

つてっお?!」

身体を引つ張られ、寝具に倒れてしまった。俺が彼女に被さる様になつてしまふ

しかしいい機会と思いたち、軽く彼女の口を押さえると

「いきなり危ないだろ!」

(悪いけど喋らないで、他に誰かいるのも分かっている

合つてるなら、うなずけ)

小声で彼女に言った

すると今までの作られた表情から、顔を青くしているが”素”の表情が現われた。

彼女は青くしながら小さくうなずく

「はぁ、わかつたよしょうがない???

今回だけだからな?」

(いいか?君は何もしなくていい

その代わり演技をしろ、喋るな。

そしたら殺しはしないいいか?手を外すからな)

小さくうなずくのを見て、俺は上着を脱ぎ上半身だけ裸になった。

ちなみに先程まで青かった荀シンが、瞬間的に顔を赤くした事を記す

閑話休題

端から見ると交わっている様にしか見えない演技をしながら、俺は隙を伺つた

終始赤い顔をした荀シンは気になったが???

そして、等々もう一人が動いた。

(!???動いた???上か!)

「きゃっ?!」

慌てて荀シンを抱き留め、寝具から飛び去る天井を破り襲撃してきたのは????

「お前だったか???蒋奇???」

前から少し目を付け、仲間に引き入れようとしていた人物だった。紺色の様な色をした髪を一房に編み、それを丸めてお団子頭をしている

目は紫色をしていた。そんな彼女は、避けられた事に驚きつつ少し赤い顔をしていた。

そして

「???蒋奇参る」

一言呟くと二対の短刀をこちらに向けながら突っ込んでくる

「くっ!」

上半身裸の上に、武器は寝具側にある

無手で相手をするのはなかなか堪える相手だった。

俺の戦闘スタイルは言わずもがな”速さ”そして剣で攻撃し、隙を見て更に接近

前世でやっていた合気道やら何やらによる

投げや関節などを使う。

特に合気道はこちらの世界にはまだ無いらしく、隙を付きやすいのだ。

それを今回はフルで発揮する

初めて無手の武術だけで戦っていた

右から切ってきたと思ったら、視界を遮る様に振り

左を死角から切り付けてくる

それを察知し、右に避けてついでに足払いをかます

それを飛んで交わしたと思ったら、投げ暗器を投擲してくる

当たる直前に、暗器に手を添える様にしずらしていく

そしてやつと右腕を決めて、地に倒した。

「っ??？」

「ハア???ハア???あぶねえ

やっぱ強いな、蒋奇」

「???ありがとう」

「おう。」

とりあえず離すが、もう暴れんなよ?」

「???わかった」

決めていた手を離し、二人して立ち上がる

すると、荀シンが先程弾いた暗器を持ちこちらに向けていた。

「動かないで??？」

貴方を殺さないと??？私の姉が??？」

ふるふる震えながら

涙を流しながら

「それに私だけじゃない??？」

蒋奇さんだ??？」

そう言われた蒋奇は悔しそうな、悲しそうな顔をしていた。

「???どういう事だ?」

そして俺は、闇を聞く

「???私達は、道化なんです

操る人は分からない

身内を人質に、動く哀れな道化??？」

彼女達を苦しめる、深い深い闇を

Side 荀シン

私は逆らえない立場だ。

私の家族、唯一の親族である姉。

桂花姉さんを入質に取られているから

こんな事になってしまったのは、まだ私が幼い頃だった。

その日は、いつもの如く平和で暖かな日だった。

私の姉は人見知りを良くしていたのを覚えている特に男の人は苦手と言っていた。

私は、姉に比べ幼い頃は活発で良く走り回っては両親を心配させていた

人見知りもする事もなく、誰とも仲良くなれたのだ。

だから幼い頃は良く私が姉を守っていた

閑話休題

そんな暖かな日差の日父の知り合いが家に来るそうので、部屋から出るのを何故か禁止されていた

しかし、私は部屋を抜け出してしまったのだ。

そして

私は父の部屋に行き

厳しくも、色々な事を教えてくれた父が

床に広がる赤い液体の中に倒れた。

私達姉妹を優しく、綺麗な顔で微笑みかけていた母は部屋にいた男に

胸に短剣を刺されながら、凌辱されていた。

私は、悲鳴もあげる事もできずに泣き崩れた。

そして男は、私に気付き???襲ってきた。

必死に抵抗をしたが、小さくて幼い私は勝てず

両親が死んだ部屋で????

母と同じ様に

それから、男は逃げ  
たまたまきた人が兵を呼び  
騒ぎを聞きつけた父の知り合いである袁成様に姉妹そろって拾われ  
た。

あの日の事を自分の胸にしまい込み  
何も知らない姉を守りたかった

袁成様に拾われ、なんとか落ち着いてきたある日  
突然、あの時の男が現われたのだ。

そいつは城にいる誰かに雇われていて、その主の為に働けと言っ  
背けば、あの日と同じ事を姉に???そして殺すと言われた  
逆らえる筈もなく、それから私は最悪な道を歩む事になった。  
特には身体を使い情報を

特には頭を使い、何処かの盗賊の指揮を

城にいると言う、会った事もない輩の為に

S i d e 荀シ n e n d

S i d e 蔣奇

???私には、義父がいた。

小さい頃、両親に捨てられ途方に暮れていた所を拾われた。

義父は感情を示さない私に親身に世話をしてくれた

そしてある日、義父が訓練中に私が興味を示したのをみて我が事の  
様に喜んだ。

元將軍の義父は自分のもてる全てを私に教えてくれた。

色々教わり、一言ありがとうと礼を言った時義父が号泣したのを覚  
えている

そんな日々を過ごしていたら、義父に客がきたのだ

ソイツは無を言わせず父を拿捕し、私も連れてかれてしまった。

それ以来義父と会わせてもらえず、聞いても教えてくれない

一度、くまなく探そうとしたら

「余計な事はするな、お前の義父を殺すぞ？」  
と言われ、渋々従うしか無かった

義父に教わった技術をただ人を殺す為に

私は、こんな事の為に習った訳ではないのに

Side 蔣奇 end

「????分かり、ました、か？」

私、達は????貴方、を????」

そう言う荀シンは泣きながら、つかえながら喋る

幼い頃から始まる辛い記憶を

蔣奇はなにも言っていないが、泣きそうなのは見ればわかった。

「荀シン????泣きやんでくれ」

俺は子供の様に泣く荀シンをほっとけなかった

「ち、近付か、ないで????」

「俺は、俺は君を????」

君達を助きたい」

「?????そんな事、言わないで！

私は、もう、何も信じない！」

だから俺は

「ぐっ！」

「?!」

「?????つ?!」

荀シンと蔣奇を纏めて抱き締めた

荀シンが持つ、暗器を脇腹に刺しながら

「そっ、そんな????」

は、離れてっ！」

「?????駄目！」

「聞け！」

「????!」

痛みに耐えながら、二人を抱き締め  
頭を撫でながら言う

「すまなかつた???」

謝ったつて、時間はもう戻らないが  
本当にすまなかつた???

同じ城にいなながら、気付けなくて???

辛かつたな、寂しかつたな

もう、大丈夫だ。

俺がいる

お前達と家族まで、俺が守ってやる

だから、もう無理するな」

優しく、語りかける様に言う。

すると????

「ううううええええ！」

苟シンは子供の様に

「?????????ぐすつ?????うう」

蒋奇は声を上げずに

今までの悲しみや辛さを流す様に泣き出したのだった。

それをみて、俺は目の前を暗くしていった

それから少し騒ぎになった。

俺が暗殺され掛かったと、一夜にして城を駆け回ったのだ  
後から聞いたのだが

それを聞き、麗羽は卒倒した

桂花は警備の見直し、犯人探しを鬼の形相でしたらしい

琥珀は泣きまくって大変だったらしい

睦月は心配のあまりウロウロ、フラフラ城の中を何をしても無くさまよったり

柳は心配？のあまりヤケ酒

悠と高覧は嚴重警備を寝ずにしたり

浮華は名医と名高い華陀を探しに旅に出ようとしたり

それはもう大変だったらしい

尚且つ、荀シンと蔣奇が俺の部屋に誰も入れなかったのもあるだろうが???

女中でさえも???

そして今回の件は、何者かが俺の部屋に進入し襲われ怪我を

そこに”たまたま”通り掛かった二人が異変に気付き、俺を助けた事にした。

俺は誓う

必ず、彼女達を傷付けた奴を見つけ

袁家を滅亡させるであろう闇を吐き出す為の布石を考えながら

おまけ

それから数日

「ちよつと！萩花！

貴女いつまで龍二様に纏わりついてるのよ！は？な？れ？な？さ？

い！」

「いや！私だつて龍二様に使えてるんだもの

別にいいでしょ！」

「ああ」

俺は右腕を萩花に左腕を桂花に掴まれていた。

ちなみに、部屋で休んでるときに二人に真名を貰った。

姓を荀、名をシン、字が友若で真名が萩花・しゅつふぁ・と言つらしい

蔣奇は真名を水仙だそうだ。

「そつえば、龍二様覚えてますか？」

「ん？なにがだ？」

「部屋で言った、話を聞いてっつてやつですよ」

「あああれか、覚えてるぞ」

「ふふっ、そうですか」

「実は????アレ本当の事ですからね」

「ちゅ」

「「「「あ”あああ!」「」「」」

そう言った萩花は、俺にキスをして離れていった。

唇に????

「????初めてだな」

「「「「ええええ?!」「」「」」

「りゅ、龍二様!わ、私も!」と桂花が

「以外????いや、これは????ふふふ」と浮華が

「あううう／＼」と琥珀が

「????????ハッ?!／＼」と悠が

今日も袁家は平和でした。

第拾話 暗雲を招く城郭、操られし道化 後編（後書き）

皆さんども

梅干しです

如何だったでしょうか？

重いかなあとか考えながら書きました。

何処までが15Rか分かりませんが今回はそうしました。

次回は龍二陣営の最後の一人をだしたいです

では、まで次回！

第拾壹話 もう一人の妹、新しい仲間達 前編

今日、やっと前に進む第一歩を踏める

信用できる仲間達が揃ったから。

なら、次にする事は決ってる

『第拾壹話 もう一人の妹、新たな仲間達 前編』  
でも人生はわからない。

俺は初めて、この世界で???

「兄上！」

「おう」

今は大体昼前ぐらい

そんな時に、客が来た。

朝頃に文が届き、色々書いてあったが要は

「お嬢さまが最近寂しがつているから、遊びに行きます」と言う内容だった。

俺の、つまり袁家の血筋で俺を兄と呼ぶのは二人だけだ。

一人はこの城に住む、麗羽

そしてもう一人は従妹である人物???

「兄上へ会いたかったのじゃあ」

今俺に抱き付いてきた袁術 公路、真名は美羽のこの娘だけだ。

「お嬢さまあ、待つてくださいよ」

後ろから来たのは、その美羽の部下で

親衛隊の隊長でもある人物???

張勳こと真名が七乃だった。

「美羽も七乃も元気だったか？」

「もちろんですよ（なのじゃ！）」

こうして改めて見ると、大きくなったものだ。

俺が初めて会ったのは、美羽がまだ五歳の頃だろうか???

始めから懐いてくれたから、子守もやりやすかったのを覚えている  
まあ、そのせいで今だに少し問題が起こっているか???

「ちよつと美羽さん！」

私のお兄様に抱き付かないで下さいまし！」

「嫌じゃ！兄上は妾の兄上でもあるのじゃ！」

「そつだそつだ」

これだ。

昔から美羽と麗羽は良く喧嘩をする

まあ、全部俺関係だから嬉しいやら悲しいやら???

これが噂のブラコンってやつなのか？

「貴女は実の妹ではないでしょう?!」

それと貴女も黙ってなさい！」

「むう〜！兄上〜！」

「龍二さまあ〜怖いですう〜」

そつ言つて二人は俺の両腕に引つ付いた。

「むむむつ！なんて羨ま〜???じゃありませんわ

卑怯な事を！」

お兄様を盾にするなんてっ！」

「麗羽には関係ないのじゃ〜」

「そつだそつだ」

「ムキィー！」

???.今日も袁家は平和みたいだ???

閑話休題

あれからしばらく続いたが、美羽のお腹が鳴いたので町にでて昼を  
食べることにした。

そして町にでたはいいのだが???

「袁悠様！こちらもお持ちになつて下さいまし！」

「袁悠様こちらもどうぞ」

先程から声を掛けられるだけじゃなく、果物や点心などをくれるのだ。

正直これを食べたらお昼はいらないぐらい

「皆さんすまないね

ほら、二人とも御礼を言うんだ」

「ありがとうございます!」

「ありがとうございますわ」

「いえいえ、とんでもないでさあ

良かったらまたおこしてください」

俺達は礼を言ってから近くにいた兵に城に持って行ってもらった。

それからまた歩きだし、店を探していると

「ここはやっぱり活気がありますねえ」

七乃がそんな事を言い出しのだ

回りでは子供達が楽しそうに笑いながら駆け回り

色々な店からは店主らしき人物が客引きをしていた。

そして、先に行く

手を繋がないだ麗羽と美羽を見ながら呟いた

「この光景は、俺の理想だ。

今はまだこの地域だけだが、他の所もこうしたい

この当たり前の光景が何処でも見れる様に

良いと思わないか?

あの子供達の笑顔を、民達の笑い声を」

「????????//」

「????ん?どうした?」

「な、なんでもないですよ!//」

「兄上!早くするのじゃあ〜!」

「ちよつと美羽さん!引つ張らないで下さいまし!」

七乃と話していると、先程より先に行ってしまった二人が声を掛け  
てきた

「お姫様達がお呼びだ  
行くか」

「はい！って龍二様？！／＼」  
そう言つて、俺は七乃の手を握つて走り出したのだった。

それからいい店を見つけ、食事をしている時に事件が起こつた。

「なんだテメエ！」

「やんのかコラア！」

突然店の奥から怒声が聞こえてきたのだ。

「びつくりしたのじゃ」

「大丈夫ですか？お嬢様」

「まったく、うるさいですわね」

「酔っ払いだろうな」

ちよつと見てくるから、三人は食べてていいぞ

「「「わかりましたわ（たー）（たのじゃ〜）」」」

奥に向かうとそこには、若い男が四人と

客らしき髪が緑色の女の子

他に店員らしき黒い短い髪の子がもめていた。

「テメエら、ちよつと顔がいいからつて調子にのんじゃねえぞ！」

「アンタらが嫌がつてるこの娘に手を出すのが悪いんだろ」

「そもそもテメエは関係ねえだろつが！」

「関係ないい？アタイは静かに飯食つたのに、後ろで酔っ払つて  
騒ぐ奴等に言われたくないね」

「あ、あのう、私はいいですからあ」

「駄目だよ、アンタこいつらに尻触られたんだろ？」

「はい???」

話を聞いて、纏めてみると

この男達は昼間から酒を飲み、尚且つ店員に迷惑をかける程酔っ払

つていたらしい

それを見兼ねた緑髪のアタイっ娘に鉄拳をくらったみたいだ。

(確実に男達が悪いだろ???)

しかもセクハラの上に逆ギレか???)

そんな事を考えていると???)

「こいつら???)、もう許さねえ???)」

おい! やっちまえ!

そんな声が聞こえた。

慌てて前にでて、短刀を持つ一人の手を掴み、その勢いで地に叩き付ける

「ガハア!」

「寄つてたかつて???)」

お前ら恥ずかしくないのか?

「なんだテメエ!」

「ただの客だつよ!」

「があ!」

他の男が殴りかかってきたので、躲しながら腹に一撃入れて倒す

「まず二人つと」

「いや、三人だよ」

声の方に向くと、先程のアタイっ娘が違う男を叩き伏せていた。

「ん、加勢はいらなかったか?」

「へへっ、いらなかったけど」

助けにきてくれたのは感謝してるよ

ありがとな!

その元気な声の御礼と笑顔に、少し可愛いと思ったのは内緒だ。  
男達を倒し二人で話していると

「テメエらだまれ!

コイツがどうなつてもいいのか?!」

「?????」

先程のリーダーらしき奴が先程の店員を人質にしていた

「ちっ」

「屑が???'」

二人して男の動きを見て、隙を付こうとした時???'

「???い???'かげ???'し???'」

「なに? 黙れ! なにいつてやがる!」

「いいかげんにしてください!」

「ぐふう!」

突然店員の彼女が首に当てていた手を掴み???'背負い投げの様な投げをしたのだ。

「????あ、おもわず???'」

「????????」

きつと、その時俺達は啞然とした顔をしていただろう  
しばらくは驚いて動けなかった。

おまけ

「ふう・・・」

「どうしたのじゃ? 七乃」

「な、なんでもないですよ!

さあ、こちらも美味しいですよ!」

「う、うむ」

(あの時の、前を見つめる顔に見惚れたなんてお嬢さまには言えないなあノノ)

第拾壹話 もう一人の妹、新しい仲間達 前編（後書き）

皆さんども

梅干しです

お待たせして申し訳ないです・・・

色々忙しく、書く暇がありませんでした。

毎月下旬はこんな感じだと思っております

それと久々なので少し変かも

後アタイっ娘の口調がわからんw

本編を少しやり直さないと・・・

次回が第一章終わりって感じですかね

第拾式話 もう一人の妹、新しい仲間達 中編

やはり歴史は多少違うらしい

なら、俺が名を馳せても言い筈だ

だから俺は新たな決意をした。

『第拾式話 もう一人の妹、新しい仲間達 中編』

今度はこの世界を知る為に???

あれから落ち着き、散らばったものを片付けていた。

「それにしても、アンタ強いんだね」

「そうか？」

そつちだつて良い動きしてたる

後キミも」

「うう／＼」

「いや／＼確かに！

良い投げだつたね」

「言わないでくださいよお／＼??？」

そんな風にワイワイしながら片付けていると???

「キヤアア!」

「「「「???'???'???'」」」」

今度は店の外から悲鳴が聞こえてきた。

「なんなんだ今日は???

厄日か？」

「あゝアタイだつてこの間用事があったのに???'???'」

「私は店番が???'???'」

「「「「???'???'???'」」」」

「ふう???'???'行くか？」

「おう!（はい!）」

三人で話し合い、直ぐさま外に駆け出した。

S i d e 麗羽

兄様が店の奥へ騒ぎを解決しに向ってから暫くして、今度は外から騒がしい声が聞こえてきました。

「なんなんですよ今日は???」

厄日なのかしら」

「うゝむ、騒がしいのう」

「そうですねえ」

何かあったのでしょうか?」

三人で待つてから、既に半刻程過ぎていた。

食べる主がない食事を見つめながら呟いた

「待つてるのも退屈なのじゃ」

ふむ???ちよつと外を見に行つてくるのじゃ!」

「え」、ちよつ待つて下さいよお嬢さまあゝ!」

そう言つと二人は風の早さで店を後にしてしまいました。

「ああゝもう!これだからお子様は!

はあ????しょうがないですわね」

流石に怪我をしたら可哀相なので、食事をしていた机にお金を置いて追いかける事にしましたわ。

しかし外にでると、直ぐ目的の人物を見つけました。

そこには???」

茶色い短い髪の女性を人質に取る男達数人と

頭から少し血を流し、地に倒れた従妹

そしてそれを背に守る様に前に立ち、剣を構える七乃がいました。

それを見て私の中にあつた何かが弾けましたわ

私達の従妹???いいえ

私達の”義妹”を傷つけた奴等に

兄様の義妹を

そして 私の大事な義妹を

「ゆるしませんわ??？」

私は今初めて、自分から剣を抜く

鍛錬はしていた

兄様からも筋は悪くないと言われた

でも私は人を殺めた事はまだ無い???

でも???

私達の家族を守る為に

私は覚悟を決めて

剣を構えながら前に走りだす

この時、回りにいた住民達は

正に一人の英雄の成長を見た

走るその背は、名門の、袁家の血筋を想わせる覇気を滲ませていた

のだから

Side麗羽end

外にでると、思ってたよりも騒ぎが酷かった。

そして嫌な予感が離れなかった

何よりも入口近くにいた筈の三人がいない事

代金を置いてあった事から、外にいる事

俺はそこらにいる人に話を聞くことにした。

「おい、これはどうした？」

「?!袁悠様!大変です!袁紹様達が!」

詳しく聞くと

ちょうど俺達が殴り合いをしている頃、突然男達が現われ店を荒らし出したらしい

しかも何故か警備の兵がこない

きても二人ぐらいで、余程相手が強かったのだらう

一太刀でやられてしまったらしい

そして問題の麗羽達だが???

なんでも、一人の女性が見兼ねて男達に声を掛け止めさせようとした。

しかし男達は無視

しかも一瞬の際にその女性を人質にとってしまった。

その時に美羽が現われ、なんと止めると言ったそうだった。

男達の一人が流石に苛ついたのだろう、持っていた剣の柄で殴ったそのせいで美羽は地に伏せ、追いついた七乃は剣を抜いた。

そこに走りながら剣を抜き切り付ける麗羽も現われて現場は更に混乱した。

今は戦いながら中央付近にある広めの所に移動したそうだった。

俺は話しを聞いて直ぐさま美羽が運ばれた所に向った。

そこは茶屋で、その店先にある椅子に寝かされていた

その女将が治療をしてくれたらしい

「美羽は大丈夫ですか？」

「当たり前所が悪く気絶をってしまった様です

頭だったので少し出血しましたが、大丈夫ですよ」

「そう???ですか」

俺は安堵し、美羽の頭を撫でて言う

「怪我をさせてすまなかつたな???

今から麗羽達とお前のやり返しをしてくるからな???

そう言うのと、密かに顔が笑った気がした

「女将さん、すみませんがもう少し見てもらっていいですか？」

「大丈夫ですよ

袁悠様???お気をつけて

いってらっしゃいませ」

俺は笑いながら???

「ええ???いつてきます」

声を掛け、走り出す

大事な家族を助ける為に

S i d e 人質の女性

私は今、自分の朝霞は差を自覚していた。

今日は城に士官しに行く筈だった

その途中で、この騒ぎを聞きつけ来たのだ

止める様に言うが聞かない

しようがないので、実力行使をして一人を叩き伏せた。

しかしその隙に捕まり、逆に人質に

しかもその後直ぐにきた一人の女の子を怪我させてしまった。

それから金髪の女性が走りながら抜刀し、一人倒した

彼女は私を開放する様に言ったが男達は勿論拒否

そしてそのまま戦いになってしまい、今は落ち着いている

それは後から合流した、髪が緑の大きい剣を持つ娘と黒髪の大きい

槌を持つ二人が乱入し

男達を蹴散らしたから

この二人と金髪の女性の三人は即席なのにいい連携をしていた。

始めにいた女性は、やっと駆付けた兵十人あまりを指揮して戦って

いた

そして今???

「さあ、貴方の部下はもういませんわ

おとなしく降伏なさい」

「ふう〜久々にこんなに暴れたぜ」

「私も疲れましたあ」

戦闘は終結して私を人質にしていた男に語り掛けていた。

しかし男は???

「使えん奴らめ

まあいいお前らを倒して悠々と逃げさせてもらおう」

そう言つと私を突き飛ばし???

名乗りを上げた

「俺の名は張 牛角

黒山賊頭目の張 牛角だ」

それは近くにある黒山に住む山賊だった。

そして有名なのが

「俺を楽しませてくれ」

その頭目は名だたる英傑に並ぶ程の武を持っている、と言われる事  
だった

S i d e 人質の女性 e n d

第拾式話 もう一人の妹、新しい仲間達 中編（後書き）

皆さんども

梅干しです

いやあ、まさか三編になるとは・・・

前編後編で終わらす予定だったのになあ

まあいいかw

後、家の麗羽はそんなに馬鹿じゃないよ！w

第拾参話 もう一人の妹、新しい仲間達 後編（前書き）

長らくお待たせしてすみませんでした。

第拾参話 もう一人の妹、新しい仲間達 後編

それは、新しい戦いの幕開け  
なら俺は自分の理想を叶えよう

『第拾参話 もう一人の妹、新しい仲間達 後編』  
今、また新たなページが捲られる

S i d e 麗羽

「せいっ！」

「たあっ！」

「うおりゃあ！」

今私達はこの騒動の頭目と戦っていました。  
この男の部下と戦っている時に乱入してきたお二人と  
しかし???

「ふっ！ハッ！」

黒髪の方が大きい槌で横に払い

その隙を、緑髪の方が大きい剣で縦に

そして私が更にその合間に突きを

それを事々く躲して、防ぐ

だから分かってしまう、私達では勝てない事を???

「くっ???当たり前せんわ???’」

「ハア???’ハア???’」

「本当に山賊かよ???’」

私達の攻撃にも息を乱さずにいました。

「さて、今度はこちらから行かせてもらっ」

「きゃあ！」

「ぐっ???’」

すると始めに黒髪の方を自分の槍で吹き飛ばし

緑髪の方は防いだ上からまた攻撃され武器を飛ばされました。

そして???

「さあ最後はキサマだ」

男は私に突きを繰り出してきました

私は疲労と、初めての实战や初めて人を殺した事でもう限界でした。

既に目の前は暗くなり???

「お???兄???様???」

最後にそう呟くと

ガキッ!

「呼んだか?妹よ」

私の最愛の人の声が聞こえてきました。

その声を聞いて安心し、私は意識をなくしました。

Side麗羽end

俺は美羽の安否を見届け、広場に急いでいた。

やっと入口に着くと、数人の兵と七乃がいた

「七乃!」

「?!龍二様!

お嬢さまが!」

「大丈夫だ、ここにくる前に見てきた

美羽は無事だ」

そう言いながら七乃に近付き、現状を聞く

「そうですか???良かった???

今は麗羽様とお二方が戦っています

この騒動は黒山賊のせいみたいです」

「なっ、黒山賊だと?!」

普通なら黒山賊が始めるのは、黄巾党がでてからで

余りの手のつけない状態に等々地位をもらい、自分達を世に知らしめた。

しかも反董卓連合に参加したほどだ

その後は曹操や袁紹と戦ったりして最終的に曹操軍に降った筈だが、それが、今の時点で動き出しているのはおかしい

既に、知らぬ内に黄巾党ができていて

暴れているならば、情報が入ってるはずだ。(危惧した事が起きたか???)

ここはやはり???)

「あっ！」

少し考えていると、事態が動いたらしい

「これは後で考えるか??七乃！」

ここは俺が行くから、今いる兵を連れて城に行ってくれ

これだけ騒いでるのに一人もこないのはおかしい」

「わかりました???

お気をつけて」

そう言い、兵達の所に駆け出して行こうとした時

「まっってください！」

人質になっていた女性が話しかけてきたのだ。

「なんですか？」

今は時間が???

「私を連れて行って頂けませんか」

「??何を言ってるんですか？」

一般の「まで、君名前は??」???

「はいっ！私の名前は沮授と申します

実は今日城に士官しに行く所でした。

軍師としての知識はあります

こんな時だからこそ、私も手伝わせて下さい！」

「??一つ言つが、これは君のせいではない

美羽が怪我をしたのも、偶然が重なってしまった事だ

罪滅ぼし等と考えてるなら、七乃の足を引っ張るだけだ」

「??確かに、罪も感じてます???

でも！、もう怪我をする方達を見たくないんです！

お願いします！」

俺はその真剣な目を見つめてから、七乃に問う

「だそうだが？」

「はあ、確かに今いる兵を分けて行ければ助かります」

「よし、沮<sub>レ</sub>茗と」ん？」

「私の真名は茗と言います

良ければそうお呼び下さい袁悠様」

「名前は教えてなかったんだがな？？なら俺は龍二だ。

そう呼んでくれ

茗は七乃と一緒に城へ

何かあつたら七乃の命令を聞け」

「わかりました」

「そろそろ俺は行くぞあちらが限界みたいだ

各自、気を引き締めて行くんだ

城はたのんだぞ」

「ハッ！」「」

そう返事すると、皆は城に向けて走り去って行く

俺は再度、黒山賊を見るとちょうど麗羽に攻撃しようとする所だった。

直ぐさま走り寄り、突き刺そうとしていた槍を剣で受け止める

「お？？兄？？？様？？」

そう呟く麗羽は、疲労困憊なんだろう

ちらりと見ると

顔は蒼白く、美しい髪も今は所々ほつれていた。

そんな顔を見て、俺は安心させる様に応える

「呼んだか？妹よ」

するとふっと笑い気絶してしまった。

それを見届け、意識を目の前の敵に移す

「キサマが麒麟児か？」

剣を交えながら相手が聞いてくる

「そうだ、だがアンタと話す時間は無い

妹も友人も、そして城も気になる

悪いが、直ぐ終わらせてもらおう!」

言うと同時に、俺は剣と足に氣を貯め

素早い動きで懐に潜り胴に向け、剣を一閃する

しかし牛角はニヤリと笑うと

自分の槍を更に突出しながら短く持ち、それで防ぐ

「流石は麒麟児か???

一瞬見失ったぞ」

「それでも防ぐか、長引かせたくないんだが???

「くくつ!こんな楽しい戦いを、早く終わらすのは勿体ないっ!」

そう言いながら縦に、横に、そして隙を見て突きを素早く繰り出してくる。

「っ!ちいつ!」

それを躲し、防ぎ、受け止めながら捌いていく

正に攻防一体の戦いが繰り広げられる。

「ハアア!」

「っ!フツ!」

数合のうち、隙を見て相手は必殺の突きを繰り出してくる。

それを、肩を犠牲に懐に入り相手を右肩から左脇腹にかけて切り付けた

こうして、歴史に名を残すかもしれなかった人物との戦いは幕を閉じた

「グツ????、流石????と言うわけか???

自分を犠牲に攻めるとは????」

牛角は血を流しながら喋る

力が入らないらしく、既に倒れていた。

それを見つめながら俺は返事をする

「アンタは強かったからな??？」

見事に肩を抉られた??？」

「ふっ??、最後に麒麟児と戦えて良かったぞ??？」

何故か、憑物が落ちたかの様な安らかな顔をしていた

「最後に??、良い事を教えよう??？」

「なんだ？」

「俺は、いや??？」

俺達は雇われだ??？」

この町を襲う様に言われた」

「なに?!」

「俺らは、黒山にある小さな村に住んでいた??？」

しかし、突然村は襲われ

女と子供を人質に捕られた??？」

「そいつらの正体は？」

「詳しくはわからん

しかし奴らは??？」

袁家の兵装だった」

「まさか??？」

「戦ってわかった??？」

これはアンタの命令じゃない??？」

なら、ゲウツ??？」

袁、家の誰かだろう??？」

「??、すまない」

「フツ??、我々は命令とはいえ、人を襲い過ぎた??？」

その報い、だろう??？」

最後に、一つ頼みがある」

心底、後悔した顔をしながら願いを言う

「言ってくれ」

「村に、俺の娘がいる???」

面倒を見て、やって???くれないか?」

「???俺で、いいのか?」

「ああ、アンタなら???大丈夫だろう???」

「コレも渡して、やってくれ」

「そう言つと、持っていた槍を俺に渡してきた。」

「???わかつた」

この表 魄麒の名前に賭けて、アンタの娘と村を助ける」

「すまん???な」

よろ???し???く、たの???む???」

「そう言つて、眠りについた。」

俺は預かつた槍を持ち、城に急ぐのだった???」

城に着くと、想像した通りの光景があつた。

城門の辺りには、兵達が倒れているのだ

ある人物はいき絶えていた。

ある人物は重傷ながらも生きていた。

ある人物は軽傷なのか仲間を助けたり増援を呼んでいた。

たつた数時間前に話していた人達がこんな状態になつていた。

「歴史が動きだした???か」

俺は忘れない様にこの光景を見る。

(これは俺のせいだ???)

この光景を忘れるな

これから戦いが始まる)

「まずは一步踏み出すか???」

目先の事を解決できない様じゃ、この先の未来なんてただの夢想だ」

俺は足速に城に入つて行く

途中にいた、比較的無事そうな兵を集めて小隊を作つていく

「誰か説明を頼む」

歩きながら、無事な者を探したりする

「ハッ！」

昼時に攻め入られました。

賊は9人で三人一組で隊を作っておりました」

「他の者は？桂花などはどうした」

「それが??？」

ちようど昼時に荀イク様、麴義將軍は演習に

荀シン様、蔣奇將軍は南の外れにある村に調査に

張郊將軍、田豊様、高覽殿は故郷の村から救援があったらしく助けに行かれています??？」

「一度に??？」

「??？伝令は出したんだな？」

「ハッ、ただ伝令が着いてない可能性があります」

そう言われ、今まで歩いてきた足を止めて振り返る

「私の失態ですが??？」

門番の中に裏切り者がおりました

その者が賊を城内に手引きした模様です」

今まで話していた門番兵長は言う

「この城内に、姿の見えない敵がいる様に思えます」

「??？名は？」

「ハッ、私は呂威曠と申します」

(なるほど??？彼もまた未来の被害者だったか)

「よし、ここはお前に任せる

俺は無事な者やまだ生きてる賊を探す」

「ハッ！」

俺は返事を聞き、まだ騒がしい城内に向った。

やはり廊下もひどい物で、女中や文官がたまに倒れていた。

そして騒がしい玉座に乗り込むと

柳が傷付いた母上を守りながら戦っていた。

S i d e 柳

俺は嫌な予感がしてた。

何故か主要の人物達が急に命令等を受けて城から居なくなっただからだ

(なんかきな臭いぜ???)

”何故か”城を抜けたのは龍二を主に持つ者達だからだ

俺は廊下を少し早く歩き、麗華殿の部屋に急いでいた。

(今なら奴等も動き易くなってる???)

攻めるなら又とない頃合だ???)

そう思つた矢先、部屋に近付いた所で悲鳴が聞こえた。

「ちっ！大当たりかよ！」

直ぐさま走り出し、腰に挿していた自分の武器を出して突入する

するとそこには

腹から血を流す剣を持つ麗華殿と、地に倒れた賊

気絶した女中がいた

それからなんとか玉座の間に逃げた

しかし部屋に入ると、賊が三人待構えていやがった。

「あゝ、厄日かちくしょう???’」

そんな事を呟き、麗華殿を守りながら戦うのだった

S i d e 柳 e n d

第拾参話 もう一人の妹、新しい仲間達 後編（後書き）

皆どもつす

梅干しです

まず始めに長くお待たせしてすいませんでした。

一応次回で第一章が終わりです

第拾肆話 新たなる道（前書き）

後書きに大事な事を書くので、よろしければ最後までお読み下さい

## 第拾肆話 新たなる道

歴史が動き出す

遂に、平和が終わる

『第拾肆話 新たなる道』

だから俺は、家族や仲間の為に

あの後直ぐに賊共を倒し、横たわる母上に話しかけた。  
柳は医師を呼びに行く

「母上??? 賊を倒しましたよ

起きてください

治療をしないと」

しかし、もう見ただけで分かってしまう

横腹は切り裂かれ、血が止めどなく流れていた。

病を拗らせていたが、それとは違う種類の顔色

あんなに暖かだった温もりも、今は冷たい

俺は、つい先ほど見た光景と重なった

「龍二???」

貴方も??? 分かっている??? でしょう?」

「わかりません

こんなにかすり傷ぐらいで、弱気にならないで下さい」

「ふふ???」

私は??? 今まで幸せ??? だったわ???」

貴方を育て??? 麗羽を産み???」

心残りも、あるけどね???」

徐々々に顔色も温もりも無くなっていく

「何を言いますか

これからまだまだありますよ

母上には返したい恩が沢山あるのですから

「ふふ????それは????」

天の国の????事かしら?????」

「っ?!母上????知つて、おられたのですか」

天の国とは俺の前世の事だろう

今までこの話しは誰にも話してはいなかったのに?????

「私は????貴方の、母親ですよ?

自分の????息子の事、ぐらい?????

わかります?????」

美しかった髪も今は輝きを無くしていた

「母上????いや、麗華さん?????」

「あら?????雰囲気が????変わるのね?

ふふ????ちゃんと、今の顔を?????

見たかつたわ?????」

既に、母上は目が見えないのだろう

血もいくら止血しても止まらなかった

「貴女には、ホントに感謝してもしきれないです?????

だから?????」

俺も母上の顔が見れていなかった

何故か顔が歪んで見えるのだ

気付いてなかった、自分の頬を濡しているのを

「ごめんなさい?????ね

貴方は????これから大変、なのに?????

見守る事も????できない?????」

今はもう顔色が白くなっていた

別れが、近い

「いえ?????

今まで、本当にありがとうございました

貴女は?????

俺の、大事な、家族????です」

俺は思い出す

訳も分ならずこの世界に来て、初めて目を奪われた光景を

「今だから言いますが、俺の初恋は麗華さんですよ」

「あらあら???麗羽に嫉妬され、ちやうわね???」

???あの娘を、この???町を???

頼みます、ね?」

「はい、命に賭けて」

「ふふ???、最後に???」

貴方の???子供を、抱っこして???み???たか???たわ  
???」

あの時と逆の様に、しつかりと???

母上を胸に抱いた

最後の顔は、一目ぼれをした、あの笑顔だった

この騒動と、袁成死去は直ぐに町や村に広がった  
しかし、一番慌ただしいのは城の中だろう

なんせ王が死んだのだから

誰を次の王にするかで、上へ下への騒動だった。

それとやはり事件直前の命令は仕組まれた物だった

演習や調査が同じ日に行われるのもおかしかった。

悠達は村に行っても、平和そのものだったそうだった。

そして今日、大事な事が決る

「それでは、次期王は袁悠様に決まりました  
よろしいですか?」

と、郭図 公側が言う

先の事件で数人いた筆頭軍師が死に

流石に桂花だけでは大変だろうと新たに筆頭になったのだ。

始めは郭図も袁家崩壊の理由の一人だったので、陣営に加えようかと思った

だが、少し接してききな臭い感じがしたので組み込むのをやめたのだ。

(つと、今はそれどころではないな)

返事を聞かれた事を思い出し、答えた。

「それは無理だ」

「……なっ?!」「」

回りにいた文官達が騒ぎ出す

しかし、答えを分かっていたのか

柳はニヤニヤと笑い、麗羽は鳩が豆鉄砲をくらった顔を

桂花は何故か目をキラキラと萩花はニコリと笑っていた

琥珀はあわはわし、新たに加わった茗は興味ぶかそうにしていた。

そして、郭図は驚きもせず聞き返してくる。

「こんな時にご冗談ですか？」

では次期王は？」

「俺は、麗羽を押し」

すると更に騒ぎ出す

「袁紹様ですか？」

しかし彼女はまだお早いと思えますが？」

郭図はちらりと麗羽を見ながら言う

「そんな事はない

それに俺は將軍職にいた方がいいだろう

今回のせいで、武官、文官、軍師、兵達、中には女中達等も被害が

ある

兵や文官、武官は募集すればいい

將軍も軍師も今いるの中から使える者達でやればいい」

「それはそうですね」

所に否定せずうなづく

「それに俺は今回痛感した。  
世を知らな過ぎる  
だから暫く旅に出る事にした」  
「ほう、そうでしたか  
それは良い事です  
ね  
ならば、お戻りになるまでは  
袁紹様が変わっていただくのも良いかもしれませぬ」  
すると初めて驚いた顔をした後、笑うが俺には良い意味には取れな  
かった。  
こうして、俺は辞退し  
次期王は麗羽になったのだ。

アレから数日後の今日  
俺は旅に行く準備を終え、馬に跨がり城門に来ていた。  
見送りに皆が来ていたが、少し問題が起こっていた。  
「龍二様！私をお連れ下さいませ！」  
「いやいや、筆頭軍師の桂花は連れて行けないだろ」  
「ならば筆頭など辞めます！」  
龍二様とお離れになるぐらいなら！  
「駄目だろ」  
そう、やはりと言うか数人が着いて来たがったのだ。  
「ならば私を」  
元々龍二様の補佐もしておりましたし  
問題はありません」  
「いや、將軍が減ったからな  
浮華は俺の軍から外れて自分の軍を作ってもらった」  
「なん???ですって???」  
見事にorzを表していた

「なら????私が????」

「あゝ、一番問題はないが

あえて言うなら桂花達を陰ながら守ってやってくれないか?」

「????????????わかった」

「だいぶ間があつたな」

苦笑いしながら言う

「ハハツ、そろそろ行つた方が良いんじゃないか?」

「そうですね、後の事はお任せ下さい」

後ろでは暴れる桂花を萩花と琥珀が押さえていた。

茗は浮華を励ましていた

「そつだな????」

じゃあ、後は頼むな悠、睦月

あの二人も鍛えてやってくれ」

「おう」

「わかりました、お気をつけて」

そう言うつと城門を抜けた

ちなみにあの二人とは料理屋で知り合つた二人だ

なんと、緑髪が文醜で黒髪の娘が顔良だつた

世の中は分らんもんだ。

馬を歩かせながら呟く

「さあ、種は蒔いたぞ

餌もある

いいかげんこちらからも反撃させてもらつ」

新たなページが捲られた

見えない先の為に一歩一歩歩き出す

結末はまだ先だつた

第拾肆話 新たなる道（後書き）

皆さんどもっす

梅干しです

とりあえず、第一章が終わりです

急いで書いたし、書きたい事があり過ぎて変に見えたらすいません  
それと、実はメールである方から「つまらんやめる」と言われました  
正直やめようかとも考えましたが、楽しみにして頂いてる方もいる  
と思うので悩んでいます

無理矢理ですが次回で辞める事もできますんで???

よろしければどうすればいいか教えていただけると助かります  
ではありがとございました

主人公？袁家キャラ詳細設定（拾肆話現在） 修正（前書き）

オリキャラが増えましたので、設定を乗せたいと思います  
龍二は少し細くなりました。

## 主人公？袁家キャラ詳細設定（拾肆話現在） 修正

### 人物紹介

旧：高須 龍二

姓：袁 - エン -

名：悠 - ユウ -

字：魄麒 - タクギ -

真名：龍二

身長：182cm

特技：合気道、柔術

趣味：鍛錬、読書

好きな物：家族、平和、辛い物

嫌いな物：争い、悪意、夢想家

苦手な物：酒（酔うと我を忘れる）

### > 容姿 <

髪は長髪でポニーテールにしている

少し明るめの金色で、陽の光が当たると輝いて見える事も

目は青く、目鼻も調っているので格好いい部類に入り

回りからモテるが天然で、鈍感な所もある

体格はガツシリ系ではなく、インナーマッスルで引き締まった身体をしている

俗に言う、『脱いだら凄い』人

### > 性格 <

温厚で優しいが、戦場では容赦ない一面も

君主として大望があり、自分の道筋を貫いている人は気に入る  
名門袁家の血筋には拘っておらず

皆で仲良く暮らせたなら良いと思っっているが、その為に血を流すのも  
必要だと割り切っている

皆に対して、分け隔てないので

男女から好かれる

蒼色が好きで自分の鎧もそれにしている

武術に長けていて、氣も使えるがあまり放出はできず

もっぱら武器や身体に付与して使っている

鍛練時に早く動く為に足に氣を使い

纏う鎧が蒼く、武器も氣を使うと蒼白くなるので

蒼い麒麟になぞらえ、「蒼駆の聳孤ーしょうこー」などと呼ばれて  
いる

他には「袁家の麒麟児」や「名家の奇才」などと呼ばれたりする

>力量<

強さ的には状況や場所によるが呂布に勝てる事もある

基本は関羽？夏侯惇？孫策などより少し強いぐらいで

知力は諸葛亮や周瑜に匹敵するぐらいある

>武器<

「蒼光護剣・ソウコウゴケン」：鏢から中心に向けて、2匹の龍  
が登る様なデザインをしている

氣を込めると蒼白く光る

「護手甲・ゴシユコウ」：手足に付けていて、至近距離戦で使用  
される

こちらにも氣を込めると蒼白く光る

姓：袁

名：紹

字：本初

真名：麗羽

好きな物：家族で過ごす時間、兄、兄との訓練

嫌いな物：華琳と桂花（兄を取るから）、辛い物（しかし兄が好き  
な為、我慢して食べる）

苦手な物：華琳との勉強

> 性格<

ブラコン

兄が大好きで、できれば結婚したい

好き過ぎて困っている

後、この作品では”あまり”おバカではなく

ある程度戦えるし、知識もある

しかし根本的な所は変わってない

姓：荀

名：イク

字：文若

真名：桂花

趣味：龍二観察

好きな物：龍二

嫌いな物：華琳と麗羽（龍二に近づくから）、柳（慣れなれしいか  
ら）、男（龍二以外）

苦手な物：運動

> 性格 <

龍二に救われてから、べた惚れ  
でも男は嫌い

回りだと、特に柳が嫌い

この作品では、昔は人見知りになっている  
後、華琳が好きじゃない

姓：文

名：醜

字：無し

真名：猪々子

好きな物：食べる事、戦う事、集団演習、斗詩

嫌いな物：文字仕事、暇

苦手な物：静かに待つ事

姓：顔

名：良

字：無し

真名：斗詩

好きな物：料理、龍二（密かに憧れている）、猪々子

嫌いな物：虫

苦手な物：争い

> 性格 <

特に二人とも変更点無し

姓：張

名：郊

字：儁又

真名：悠・ゆう・

身長：178cm

特技：演舞

趣味：お買い物

好きな物：仲間、龍二（憧れている）、甘い物

嫌いな物：汚い奴（色んな意味で）、卑怯

苦手な物：家事全般

>容姿<

背が龍二なみに高く、髪は黒に近い青

首の後ろで束ねて括っている

顔だちも凛々しい感じなので、女の子にモテるタイプ

胸が無いのが悩み

>性格<

明るい娘で

仲間を凄く大事にしている

龍二の噂を聞き、憧れていた。

正義感が少し強いので、卑怯な事が嫌い

>力量<

趙雲や張遼並の速さで突きを繰り出す事ができる

>武器<

「蜂典姫・ホウテンキ」：刃部分が細く、鐔から柄尻にかけて護拳が付いていて、エストックの様な形をしている  
切るのには適していなく、突き刺すのが主体の錐剣である

姓：高

名：覽

字：無し

真名：無し

身長：186cm

特技：家事全般

趣味：酒

好きな物：仲間、笑顔

嫌いな物：下衆、盗賊

苦手な物：甘い物

>容姿<

身長が皆の中で一番高い

髪は雑に切り揃えていて、黒髪

龍二とは逆の位置にいる体系で、姿に似合わず早い動きで戦える  
しかし武器は似合い過ぎている

>性格<

少し乱暴な感じだが、忠誠心は強い  
荒振れ者達を鍛えるのには必要な人物  
仲間が大事で、それを悠に教えたのは高覧  
悠の父替り件兄替り

>力量<

典章や張飛に引けを取らない力を持つ

>武器<

「剛兇牙・ゴウシュウガ」：文醜とはまた違った大剣で  
肉厚な刃で、樋の部分に虎が描かれている

姓：田

名：豊

字：元皓

真名：琥珀・こはく

身長：153cm

特技：お菓子作り

趣味：読書

好きな物：甘い物、龍二

嫌いな物：非道

苦手な物：動物（何故か寄ってくるから）

>容姿<

背が小さく、龍二の胸ぐらいまでしかない

髪は短く赤茶色で肩まであり、癖っ毛で毛先が丸まっている  
背が低いのに胸があるのが実はコンプレックス  
仲間内で一、二を争うほど

> 性格 <

基本的にホワホワしている  
のんびり屋だが、戦闘時の凛々しさは  
見る目を変える程である

> 力量 <

陸遜や程晃ぐらいの知識で、非常時には郭嘉並にひらめく事も

姓：麴

名：義

字：無し

真名：睦月・むつき・

身長：165cm

特技：早駆け

趣味：遠乗り

好きな物：仲間、馬、龍二、果物、甘い物、酒

嫌いな物：辛い物、蛇

苦手な物：特に無し

> 容姿 <

健康的な体で、少し小麦色に焼けている

髪は長髪で胸辺りまであり  
燃える様な紅い色をしている

>性格<

サバサバした性格で姉御肌な感じ  
でも、甘い物が好きで  
蛇が苦手と、可愛い一面も

>力量<

馬超や公孫贄の様に馬術に長けている  
羌族の戦い方を覚えているので、奇襲が得意

>武器<

「神雷槍 - シンライソウ -」：柄部分が黄色く、刃先が三つに分かれた槍

氣を込めると帯電する

姓：許

名：攸

字：子遠

真名：柳 - りゅう -

特技：利き酒

趣味：兵法書を読む、可愛い娘に声かけ（ナンパ）

身長：178cm

好きな物：義兄弟、友、可愛い女の子、奥さん、酒  
嫌いな物：面倒事

苦手な物：曹操、夏侯惇

>容姿<

黙ってれば格好いいタイプ  
髪は短く、濃い緑色をしている  
戦えるとは言え元は軍師なので  
筋肉はあまり付いてない

>性格<

可愛い娘には声を掛けずにはいられない  
そして結局奥さんに怒られる  
龍二にはホントに感謝していて、なにか頼まれたら絶対に断らない  
ちなみに義兄弟の兄である

>力量<

魏延や楽進並に戦える  
呂蒙を少し強く感じた感じ

>武器<

「尖鋼鉄剣・センコウテツケン」：刃先にいくほど細くなる剣

姓：淳于

名：瓊

字：仲簡

真名：浮華・ふうか・

特技：速読

趣味：料理（食べれない）

身長：167cm

好きな物：龍二、辛い物、甘い物、

嫌いな物：特に無し

苦手な物：龍二の視線（何もできなくなる）

>容姿<

銀の長髪で、腰辺りまである

後頭部で束ねて纏めている

ちなみに仲間で一番胸が大きい

>性格<

龍二の前では良き副隊長で、秘書の様に側に笑顔で寄り添っているが部下などに会うときは、冷静な顔になってしまう

特に敵には容赦無く、冷静冷徹になる

ちなみに始めの頃龍二とは顔が合わせられなかったが、今は目だけになった

>力量<

甘寧や夏侯淵などのオールマイティータイプ

色んな場面で使える武將

>武器<

「鳳桃閃槍・ホウトウセンソウ」：柄が蒼く、刃部分に向うに連れて桃色に変わっている

部類は長巻に入る

姓：荀

名：シン

字：友若

真名：萩花 - しゅうふあ -

特技：家事全般

趣味：読書、書き物

身長：155cm

好きな物：姉、龍二

嫌いな物：一部の男

苦手な物：盗賊、乱暴者

> 容姿 <

姉と瓜二つで、姉を活発な感じにしたて

亜麻色の濃い髪を癖っ毛にすると萩花になる

> 性格 <

基本的に活発な娘で

明るい、裏の影の部分を知るのは龍二と

水仙だけ

> 力量 <

姉とほぼ変わらないが、政務の方が得意

姓：蔣

名：奇

字：無し

真名：水仙 - すいせん -

特技：足音を消す

趣味：昼寝、日向ぼっこ

身長：171cm

好きな物：義父、龍二、

嫌いな物：無駄な争い、卑怯な奴

苦手な物：特に無し

> 容姿 <

紺色の髪で腰辺りまであるのを一房に編み、丸めてお団子にして後頭部にとめている

> 性格 <

寡黙な娘であり喋らないが、普段はほんわかした気配を漂わせている

しかし、戦闘になると攻撃主体が暗殺なので

一撃離脱を繰り返し、必ず仕留める非情さも持ち合わせている

> 力量 <

周泰や甘寧の様な、トリッキーな動きが得意

> 武器 <

「音無 - オトナシ -」：二対の短刀で、鞘から抜いた音も無く切られたのも分からない事から名付けられた

他に数点暗器を扱う

姓：沮

名：授

字：無し

真名：茗 - めい -

特技：特に無し

趣味：掃除、読書

身長：164cm

好きな物：書物、龍二（憧れ）

嫌いな物：特に無し

苦手な物：動物、虫

>容姿<

肩ぐらいまである髪でおでこがでている

明るい水色の髪をしている

胸が無いのが悩み

>性格<

温和で争い事に似合わない娘だが、戦闘時の閃きや知識は袁家一かもしれない

龍二に憧れて士官した

>力量<

賈や郭嘉の様な安定した力を持つ



主人公？袁家キャラ詳細設定（拾肆話現在） 修正（後書き）

皆さんどもっす

梅干しです

まず始めに、前回のアドバイスありがとうございました

皆さんの温かい言葉に励まされ、また頑張っ行ってこうと思えました  
これからも頑張っていきますので

よろしく願います！

次回から少し外伝がはいるかも

良ければリクエストなんて頂けたら、書けるかもw  
では、また次回



とある城の中

梅干し（以降、梅）「祝！」

PV40万&amp;・ユニーク6万ヒット

ありがとうございます！」

龍二（以降、龍）「??????」

梅「イヤッフウウ！」

龍「??????」

梅「やつて「だまれ」グハア！」

龍「まず言う事があるだろう」

梅「うう????、更新遅れてすみません????」

龍「理由は」

梅「一つはスランプです????」

後は作者の事情ですが、潰瘍性腸炎になりました????」

龍「駄目駄目だな」

梅「うう????、すみません」

龍「これからまた更新していくんで、許してください」

梅&amp;・龍「ホントすみませんでした！」

梅「改めて、今回は質問がきていたのを答えたいと思います」

龍「今さらだけどな」

梅「うう????、まず一つ目です????」

『拠点みたいな個人の話あるの?』

梅「一応あります」

龍「第一章が駆け抜けた感じが大きいからな」

梅「今のうちに書かないと、お前旅に出たからしばらく袁家組と絡まないからなあ」

龍「まあ過去話って感じか？」

梅「そうだな、では次」

『まだオリキャラでるの？』

梅「でます」

龍「だすのか」

梅「だします、実際に考えると袁家は軍師率が高いから武将がでるか」と

龍「多すぎないか？」

梅「うゝむ？？、正直そこはしょうがない

新「だからなあ」

龍「まあな？？、では次」

『真名とか直ぐ教え過ぎじゃね？』

梅「これはまあ考えての事です

一応龍二の名前は知れ渡っている有名人なので」

龍「基本俺は気に入ったら奴なら教えるからなあ」

梅「分かりやすく言つと、原作で桂花が華琳に真名を教えたのと同じ様な理由です」

龍「憧れだっけか？」

梅「憧れの人で、尚且つ有名人が先に真名を教えたら逆に教えるかな？」と」

龍「何気に俺から教えてるからな」

梅「まあそう言つ事だな、では次」

『龍二の歳は？』

梅「恥ずかしながら原作メンバーの年がわかりません  
なんで、大体孫策や周瑜と同じで

黄忠や嚴顔、黄蓋よりは下って感じですよ」

龍「麗羽や華琳、孫権なんかは少し下だな」

梅「？？？劉備は？」

龍「そんな奴は知らん」

梅「????ラスト!」

『誰が一番に落とすの?』

何処からともなく現われる乙女達

みんな「「「「????????」」」」

梅「????????」

龍「????????」

梅「・・・なんか言え」

龍「????????パス!」

みんな「「「「????????」」」」

無言で武器を構える乙女達

梅「ガクガクブルブル」

龍「????俺は生きる!」

ダッ!

ダダダッ!

走り去る龍二、を追う乙女達

梅「こ、今回はこれまで

では、次回の記念回に!

さよなら」

龍「アアアアアア!」

皆さんども（・・）ノ

梅干しです

長らくお待たせして申し訳ありませんでした

説明した通り、スランプと病気で書く気がおきませんでした???  
また少しずつ更新して行きたいと思えますので、よろしく願います

最後に一つアンケートを

今は外伝を一つ書いてる途中ですが

先程言った通り拠点も書くこうと思ってます

なんで、誰の拠点を見たいか

又、どんなやつが見たいかなどをアンケートしたいと思えます

例

麗羽のブラコンにつき子供編

子供時代の龍二を見つめる麗羽の日記風話  
など

気長に待って頂けると嬉しいですw

では、次回！

予告編 魔法少女リリカルなのは 英雄の血筋 (前書き)

これは作者のテンションを上げる為の話です。

一応次回作に考えてますが、当分先なのであしからず

予告編 魔法少女リリカルなのは〜英雄の血筋〜

「ここが次の世界か」

男は、美しく気高い姫達の世界を渡る――

「今回は現代なのか」

にしても、孤児とはなあ

男は世界を渡り、また一人になる――

「私はギル？グレアムと言う」

君、良ければ私の息子にならないかね？」

新しい世界は――

「それは、俺が???」

――魔法が使えるからですか？――

魔法使い達がいる世界だった――

魔法少女リリカルなのは　〜英雄の血筋〜

男は新しい世界で再び家族を――

「ほらほら！うまく避けないと当たるよ！」

「ちょ！アリアまでっ！」

「クロノ！止るな！」

「はいはい、君はこっちねえ」

「うわあ〜!!」

新しい友を得る――

「管理外世界？」

「ああ、良ければ手伝ってもらえないか？」

「私達の艦は、クロノしか執務官がないから

あなたがいると助かるのよ」

「ふう???、リンディさんから頼まれたら断れませんよ」

「ふふふ、助かるわ」

所でそろそろ考えてくれたかしら？」

「ああ〜いや、その??？」

「確かに、一つ二つ離れてるのはしょうがないわでも歳が近い?????父親も悪くないんじゃないかしら？」

「母さん?!」

その世界では、悲しみを乗り越えた家族を――

「まてっ！ここで戦闘するのはa「お前がまて」グハア！」

「時空管理!???局？」

「えつと??？」

「にはは??？」

「????(あの人、今おもいつき殴ってなかったかな?)」

悲しみを知らない少女を、頼る事を知らない少女を、それでもなお無垢な心を知る――

「貴方たちは、一度帰って考えろ「リンディさん」何かしら？」

「無意識ですか？」

「？」

「はあ……」

「??？」

男は少女に現実を受け止めさせる――

「いいかいなのはちゃん

魔法はね、”力”じゃないんだ

非殺傷なんてあるけど、攻撃し続ければショックだって起こす

「で、でもっ！」

「止めろと言ってるんじゃない。

非殺傷なんてものに頼っただけじゃダメなんだ。

いいかい？

魔法はね、”力”じゃなく

”技術”だ」

男は悲しみの余り狂う心を諭す――

「アンタはさっき自分の子供じゃないと言っただな？」

「それが何かしら？」

あんな人形は私の子供でもなんでもないわ！」

「そうか、ならアンタは子供はいないな」

「何ですって????」

「なんだ、科学者とも在ろうプレシア女史が分からないのか？」

「分からないもなにも、あのこはただの人n「違う」っ」

「フェイトはアリシアのクローンだ

ならアリシアを生んだのは？」

そこから生まれたフェイトは要は妹みたいなものだ

科学的に言うか？

同じ” 遺伝子” を持つフェイトを否定するなら、アリシアも人形になるな

妹だ、利き手だつて違うだろう

性格だつて違うだろう

アンタは親じゃないのか？

フェイトは、アリシアは！

アンタが愛した男の、子供じゃないのか?!」

男は少女に、少女の心に手を伸ばすー

「君の名前はなんだ？君は人形ではなくてプレシアの子供で、アリシアの妹だ。」

「わた????し????は」

「もういない姉の為に、こんな所でつまずくな!」

「私????は」

「未だに悩んでる困った” 母親” に文句の一つでも言って来い  
もう一度聞くぞ????君の、名前は？」

「私は????!」

男は再び世界を救うー

そして救われた少女達はー

「あのっ!」

「ん?」

「な、名前を教えてください、ください！」

「私も！」

「教えたろ？」

「も、もう一度お願いします???」

「そして友達です！」

「ははっ、そうか」

名前を呼んで、だったか？」

「はい／／」

「にやはは／／」

「んじゃ、教えないとな」

俺の名前は――」

それは新たに読まれる本の始まり――

新たな世界は”魔法の世界”――

そこは、姫達の世界とは違う悪がはびこる世界――

そこで再び世界を救う――

予告編 魔法少女リリカルなのは〜英雄の血筋〜（後書き）

皆おひさしぶりです

まだまだ微妙なスランプが続いています・・・

こつ言う時に限って、新しい案がでるのが困り者ですorz  
早く更新せんとあ

拠点一 & I t ; 美羽 & g t ; 精神性移！、兄上のために？（前書き）

遅ればせながら、拠点話です  
リクエストがあつた美羽からで

拠点一 & l t ; 美羽 & g t ; 精神性移！、兄上のために？

「なんじゃこりやああ？！」

それは朝の早い時間、龍二の部屋で起こった事件だった。

突然部屋から叫び声が聞こえたのだ

慌てて来たのは、隣りの部屋の麗羽、ちょうど早朝警備をしていた水仙、そして最近朝方一緒に訓練している睦月だった。

「お兄様！どうしました？？？の？」

「？？？？？？？？龍二？」

「？？？私はまだ寝ぼけてるのか？」

扉を壊さんばかりに入って、一番に目にした物？？？

それは――

「俺にも何がなんだか？？？」

寝台の上に体を起こした、立たなくても分かる程の豊満な胸

そこから流れる様に引き締まっている身体

寝ていたので、いつもは縛っている髪も解いているため、無造作に後ろに流れているのにそれが普通と思わせる雰囲気。

極め付けは――

「くー？？？くー？？？」

引き締まった身体なのに、健康的な程よい肉付きの腿に頭を乗せ寝ている美羽が相俟って・・・

それはもう正に絶世の美女と言わんばかりの――

慌てた顔の龍二の姿だった――

――

――

拠点一 > 美羽 < 「精神性移！、兄上のために？」

時間を逆上る事、数時間前

今日も遊びに来た美羽だったが

今日はいつもと違い、途中から一人で来たというのだ。

「来てくれるのは嬉しいが、心配はさせないでくれ」

「うう、ごめんなさいなのじゃ??？」

でもでも！兄上に早く会いたかったのじゃ！」

「ははっ、そうか」

なら俺も一緒に七乃に謝らないとな？」

そう言いながら、俺は美羽の頭を撫でながら言う。

「うむっ！」

すると美羽は、嬉しそうな顔をこちらに向けながら返事をして来るのだった。

――ちなみに、少し離れてる向こうでは

奴を仕留める、だとかこの人本気だよ！止めないと！、とか

桂花が発作を起こしたぞ！、等はキコエナイ

閑話休題

アレから場所は変わって、調理場に来た。

なんでも美羽が俺に手料理を作ってくれるらしい。

ただ――

「????なあ、美羽

本当に”それ”使うのか？」

「うむっ！綺麗な色なのじゃ！」

きつと美味しいに違いないのじゃ！」

そう言う手に持つキノコは、某キノコ大好きオジサンが食べてそうなモノだった。

（見た目からして拙い気がする???)

それにしても、あのオジサンは何故キノコを食べると大きくー)

「兄上！聞いておるのか？」

「んっ?あ、ああ少し考え事を????な」

「もしかして???)

わらわが作ったのは食べたくないのかの?????)

「うぐっ???)

先程までの笑顔が消えて、今は泣く寸前の様な顔をしていた。

(ふう???、妹を悲しませるのはな???)

「いや、違うぞ？」

これからどんな旨い料理ができるのか

それを考えてただけだ」

俺は頭を撫でながら、慰める様に言う

「?????本当かの？」

「ああ」

少し上目遣いにこちらを見る美羽に、笑顔を向けて返事をした。

「うむっ！なら頑張って作るのじゃ！」

そう言うないなや、意味の無い腕捲りをしながら調理に向かうのだ  
った。

そこで俺は聞こえない様な距離になった時、空を見上げー

「母上、もしかしたら今から会いに行くかもしれない??？」

そう言わずにはいられなかったー

┆

┆

「「いただきます(のじゃー)」「

お互いに挨拶をして食事を開始する

と言っても、美羽は俺が作った白桃水だけが。

蜂蜜水は七乃が一番だそうだが、この白桃水だけは俺以外誰にも作  
れないらしい

そして俺の目の前には、美羽オススメの”採りたて”キノコ炒めが  
鎮座していた。

???ポイントは”採りたて”だ。

正直不安一杯だが、見た目も悪くなく

何より向えに座っている美羽が目をキラキラさせているので、食べ  
ないなんてできなかつた。

「いただきます????パクッ、ムグムグ????」

「どっじゃ?!」

美味しいかの?」

「??????」

「??????」

「??????」

「だ、駄目だった????かの?」

「?????ま????い」

「?????む?」

「これは、うまい」

「本当かの?!」

調理前のをみていたので、不安だらけだったが  
食べてみたらそれはもう上手かった。

「ああ、美羽も食べてみるか?」

「いいのじゃ」

これはわらわが兄上の為に採ってきたのじゃ

それは兄上に食べてほしいのじゃ!」

そんな事を言う美羽は、下を向いて言っているが  
顔が紅くなっているのが見えた。

「美羽????、そうか

ありがとな」

「えへへ／＼照れるのじゃあ／＼」

照れながら白桃水をチビチビ飲む美羽を見ながら、皿が綺麗になる  
まで食べ尽くしたのだった――

――  
閑話休題

「と、こんな事があつたかな」

「どう考えてもそのキノコが原因ですわ――!!!!」

あの後、緊急で皆を呼び原因の心当たりを話した後だった。  
そして終わった瞬間に麗羽が叫んだ訳だ

ちなみに

とある服従軍師の場合

「龍二様！一体何がaブフリー！」  
鼻血をだして倒れる

とある義兄弟の場合

「急に呼ばれたがどり、お嬢さん良ければお茶などいかが？」  
それ以上??? 駄目???」グフウ！」

急に態度が変わりながら、近付いてきたので脇に控えていた水仙に止められる（物理的に）

など、反応が凄かった

「とりあえず、今は美羽が起きてから話しを聞いてみないとな」

「何を悠長な事を言ってますの！」

大体お兄s、いえ今はお姉様ですわね

お姉様はいつもいつもー」

こんな大事なのに、いつもの様に冷静な龍二だったー

ー

おまけ

龍二と麗羽が話してる裏で

「アレは??? すごいな」

「??? 負けた」

水仙と睦月は美女になった龍二を見ながら話していた。

「あつちはあつちで拙そうだしなあ」

「??? 桂花はいつもよりひどい」

二人は目を移動させ、少し離れた所に視線をやった。

「まさか龍二様が???」

いえ、でもアレはアレで??? ブツブツ???

ああ、龍姉様あ／／」

「????????」

そこには顔を紅くしながら身体をくねらせる桂花と、先程の打撃が

良い所に入ったらしく

今だに起きない柳が寝ていたのだった

「????今襲われたら、袁家は落ちる気がする????」

「????大丈夫、?????たぶん」

不安だらけの二人だった

拠点一 & l t ; 美羽 & g t ; 精神性移！、兄上のために？（後書き）

皆さんども（。 。 ）ノ

梅干しです

今回等々拠点を書けました。

せっかく美羽拠点なのでこの設定を続かせてみましたw

楽しんでいただけたら嬉しいです

次は外伝を書きたいですねえ・・・

では、また次回！

予告編 ゼロの使い魔〜王族の血筋〜（前書き）

これは前回と同じく作者のテンションを上げるための物です  
続きは当分無いのであしからず

予告編 ゼロの使い魔と王族の血筋

「ここは…森か？」

しかし、今回はある程度成長してるのか。」

また新たなページがめくられる

そこはまた、戦いがある世界

「おとなしくしろっ！」

「っ！」

「お前ら、子供に何をしている！」

男はまた出会いをする

「ありがとうございます、助かりました」

「ああ、怪我は無いか？」

「大丈夫です、申し送れました。」

僕はウェールズ、ウェールズ・テューダーと言います」

「そうか、よろしくな少年」

「……」

「……」

「…驚かないのですか？」

「なにがだ？」

「はは…」

「??？」

新しい世界

「とりあえず、お礼がしたいので付いてきてもらえますか？」

「お礼はいいが、こんな所で少年をおいていけないさ」

「ありがとうございます、では掴まっててくださいね」

そこは

イル・フル・デラ・ソル・ウインデ！

「っ」と

『貴族』と言う名の悪が蔓延る、また新たな魔法の世界だった

新しい世界で出会ったのは、幼いながらも誇りを持つ心

「僕はこの世を変えたい、民を蔑ろにする国は国じゃない

国は、民があつてなり立つのに…」

「…それをわかっているから、キミは今がんばっているんだろ？」

「はは、ありがとう」

あなたが僕に仕えてくれるなんて、今でも不思議だ」

悲しみを溜め込み、意地になる幼い心

「うう……、いつもいつも！

どうして…どうして私は！」

「なあルイズ、どうしてそこまでがんばる？」

「だって！だって私は公爵家の娘でっ！

みんなから…期待…され、て…」

「公爵家がなんだ？周りから期待？

そんなもの放っておけ

ルイズ、キミはまだまだ子供なんだ。

親に姉に甘え、友人と遊び、好きなものを食べ、そして寝る

これでいいんだ」

「…でもっ」

「何かあつたら俺に言え、嫌な事から守ってやるから

俺たちは『友達』だろ？」

男は、この世界で再び家族の愛を垣間見る

「どうしても許していただけませんか？」

「エルフだぞ?!そんなもの認められん!」

「…ならば、私をお切りください  
生涯愛すと誓った妻と、愛しい娘を殺すためにさし出すぐらいなら  
私は生きてくありません。」

そして時代は巡る

「それはできない、僕は王族だからね」

「そんなっ！では姫様は！」

「彼女には…最後の最後で腑抜けかウエールズ」っ貴方が…」

「アルビオンが滅ぶ？だからなんだ

王族だから？ふざけた事を言うな

王族だというなら、なんとしてもここから逃げろ

そして機会を待ってもう一度国を作れ

思い出せ、国は、何があつてなりたつ？」

「…国は、何があつて…」

「お前は何だ？ウエールズ・テューダー」

「僕…は」

男は再び戦場に立つ

「これは絶景だ、7万の軍勢…ね」

「なんだ、怖気づいたのかね？」

「いや、この人数ならしょうがない様な…」

「なんだ相棒もかよ」

「さて、いくぞサイト、ワールド、デルフ」

「…「オウ！」」」

それは新たに読まれる本の始まり

新たな世界はまた違った”魔法の世界”

そこは、姫達の世界や魔法少女達の世界とは違う悪がはびこる

世界

そこで再び彼は世界を救う

## 予告編 ゼロの使い魔〜王族の血筋〜（後書き）

皆さんども、梅干です

更新が遅れ申し訳ないです。

最後はグダグダ感がありますがお許しを

これからののですが、外伝・拠点の案はあるものの一行に指が進まないの

本編を進めようかと思えます。

外伝などを楽しみにしてきてくれた方は申し訳ないです。  
でも絶対書きますので、お待ちいただけると助かります。

ここからは宣伝？を

このたび、真・三国無双オンラインに龍二のキャラを作り参加します

名前は袁悠で、所属軍は呉

ギルドも作っています。

「名門の血筋」で作りましたかたんですが、無理だったので

「名門の血脈」と名づけました。

すでに参加してる方でギルドに入っていないければ一緒にやりませんか？

フレンドも大歓迎です

この話を聞いて、興味を持った方

無料なので一緒に戦場に立ちませんか？

我がギルドは歓迎します

へたれギルマスですがどうぞよろしくですw

それでは、まて次回！



外伝二 そうだ、涼みに行こう（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません

詳細は後書きにて

後季節的なのは気にしない方向でお願いしまふ

## 外伝二 そうだ、涼みに行こう

これは日常の1ページ

「外伝二 そうだ、涼みに行こう」

平和な一日の出来事

「暑い…」

「そうですねえ」

最近気温が上がってきて、凄く暑い

前の世界なら今は夏頃になるのだろうか？

とにかく暑いのだ。

兵達もこの暑さのせいで訓練も身が入らない様で

「気合いをいれろっ！」と叱る睦月や悠も汗だくだから今にも倒れ

そうだった。

「氷があるわけでも無いしなあ…」

「こおり…ですか？」

と、俺の執務室にある机にタレる浮華が

首を傾げながら疑問そうに聞いてきた。

「ちよつと可愛いと思ったのは内緒だ

「あゝ、水を冷やすと作れるんだ」

「ほう」

想像したのだろう、少し幸せそうに微笑んでいる

…可愛i (ry

「こつ暑いと水浴びでもしたいですねえ」

その言葉を聞いた瞬間閃いた。

「それだあああ！」

「わひゃう！」  
つい肩を掴み至近距離から見つめてしまった。  
案の定目を回したのは言うまでもないだろう  
閑話休題

アレから直ぐさま予定を組み、流石に全軍ではまずいので  
細かく分け、近くの小川行くことにした。  
そして、こういう時に重要な物を  
町の服屋で作ってもらったのだ。

「は、恥ずかしい……」

「普通の服よりハズいなあ……」  
そう

暑い日に水浴びと言えば

『水着』だ

「眼福だな……」

色とりどりの水着をきた皆を見つめながら呟く  
ちなみに数人兵もいるので、後ろでは

「俺…、もう死んでもいい……」

「副長おお！俺だ！結k（ry：グハア！」

「見る、これが理想郷だ」

「あの胸すげえ……」

「いやいや、田豊様の胸が世界一だ」

等と、大変満足している様だ。

ちなみに男達も海パンや

果てはブーメランまでいる

俺は膝下までの海パンだ

とりあえず

今はもうしばらく目の前の理想郷を見ていよう

Side 桂花

今日私達は、城の近くにある小川に来ていた。なんでも、最近の暑さのせいでだらけてるので慰安や避暑を予て予定されたらしい

（ああ…、流石龍二様だわ…

兵達の事も考えてるなんて…）

それにしても、こういう時に着る物として渡された水着という物を着ているが…

「龍二様はいいけど、あんな男どもに見られるなんて!」

そう、二人きりならいいが

兵達数人がついて来ているので

私を血走った眼で見つめているのだ（勘違い）

「まあまあ、落ち着いてよ姉さん

慣れればコレもいいよ?」

声を掛けてきたのは妹だった。

萩花は私と似た様な水着で

”すくーる”水着と言っらしい

私は”旧すく水”と言う物を渡された。

あの時の真剣な顔をしている龍二様は…

「はふう…」

「あはは…」

そんな事を話していると

「は、恥ずかしい…」

「普通の服よりハズいなあ…」

着替え終わった悠と睦月が歩いて来る

悠は”わんぴーす”らしく、ひらひらしたのが沢山付いた水着だった。

睦月は”びきに”という水着を着ていて、健康的な身体をさらけ出していた

（くっ、身体に自信があるからってええ!）

そんな二人を恨みを込めて睨んでいると



「…ほつとく」

「ですね、行きましょう」

それからしばらく、私は妄想をしていたのだった。

Sideend 桂花

アレから合流し、皆個人個人で遊び出した

ある者は、木陰でゆっくり涼み

ある者は、昼に食べる魚を釣りに

ある者は、水を掛け合ったり（男兵士達）

と、楽しそうに遊んでいた

そして、うちの綺麗所達は…

「ハア！」

「そこ！」

「右よ睦月！」

「任せな！」

水の中でビーチバレー（激）をしていた

まあ、先ずはビーチでもないし

そもそも休めてるのか？

などいろいろ疑問が出ているが

一つだけたしかながあった

「なんとという光景…」

目の前に、天国があるのだから

俺はそんな光景を見ながらも

久方振りの休日をごっこしていったのだった。

外伝二 そうだ、涼みに行こう（後書き）

皆さんおひさしぶりです

長らく更新せずに申し訳ないです

言い訳にしかありませんが、理由は

やっと直ってきたスランプが

PCが壊れ今までのからストックまですべて無くなり絶望に変わりました…

これからも頑張りますので、リハビリからになりますが見てもらえると嬉しいです

あ、あと変なおわりかたですいません

では、また次回に

拠点一 & 1 t ; 浮華 & g t ; 貴方に出合って (前書き)

拠点話しです

浮華との出会いを書いてみました

拠点一 & l t ; 浮華 & g t ; 貴方に出合っ

拠点一 > 浮華 < 『貴方に出合っ

ある日の修練場

そこには一人の声が上がっていた。

「全員、武器構え！」

「ハッ！」

「そこから陣を組め！」

「ハッ！」

「右翼！遅れている！」

そんな事では他の仲間が死ぬぞ！！」

「も、申し訳ありません！」

それは淳于瓊事、浮華その人だった。

「??? 燃えてんなあ。」

「いえ、アレは八つ当たりでしょう」

そんな荒振る仲間を呆れて見ているのは

麴義事、睦月と

張郊事、悠の二人だった。

S i e d 悠

事の発端は、我らの主たる龍二様が旅立った日から始まりました。

浮華は旅立の事もそうでしたが、

何より龍二様の軍から抜けたのが一番の衝撃を受けたそうです。

普通は出世なので喜ばしい事だ、と言っ

お酒のせいかは分かりませんが

顔を紅くしながら声を上げました。

「私は！あの方に認められてここにいるのよ！  
だから、私は龍二様のお側でっ?!…うう…」  
流石にうるさかったので、気絶させましたが…  
Siebend

私は淳 于瓊

小さな村の出身でした。

しかし私の村は、山賊に襲われ壊されてしまいました。  
生き残った者は数人しかいなく、

若い者は私以外いませんでした。

そんな絶望な世界を、救ってくれたのがあの方でした

その日私は、朝から寝たきりの母を世話して、川に洗濯に行つてま  
した。

ようやく終わり、村に戻る途中で村付近から煙りが上がるのが見え  
慌てて走りました。

しかし気付いた時には遅く

村は焼かれ、知り合いの商人のご夫婦は無惨に切り殺され  
隣りに住んでいた一つ下の、妹の様に可愛がってた娘は

裸に剥かれ虚ろな目をして亡くなっていました

そして、私の只一人の家族は

寝台の上で

その身体を

串刺しにされていたのでした……

それから、放心状態のまま避難場に行くと  
少し遅れて助けがきました。

その人達の旗は

黄色い縁取りをし、中心部が蒼白い色で

袁の字が書かれています。

兵の方達が、私達に話を聞いてきて

説明すると、長い金髪の方に報告していました。

すると、話を聞いた方は

馬から降り、私達に謝罪をしてきたのです

「遅れて本当にすまない

謝った所で、亡くなった方々は戻らない…

しかし、これは俺達のせいだ…

皆、すまない」

そう言うと、後ろの兵の方達も一人一人に謝って回ってました。

それからの行動は早く、生き残った私達を町に住める様にしてもら

える事に

働きたい者は仕事を

ほしい物があれば、ある程度の物も貰える様にもなりました。

そして、いざ行こうとした所で

私の家族を殺した奴等が戻ってきたのです

それからは記憶が余り無く、後で話を聞くと

その時私は盗賊に向って行き次々と倒したそうです

しかし、多勢に無勢で徐々に傷付き

死を覚悟したのだけは覚えていました。

そして、盗賊の刃がくるのを見ていたとき

私は優しく抱き締められ

あの方が身を呈して守ってくれたのです

あの時の事は忘れません

優しい笑顔で

でも、困った顔もしながら

「君が強いのは認めるけど、無理しちゃだめだ。

君の剣は復讐なんかで使うな

みんなを守る、誇り高い剣になれ」

そう言いってから

少し休むよう言われ

長い金髪を揺らしながら、体の四肢を蒼白く光らせ敵陣に突撃する  
背中を

そしてこの時、私はわかりました。

あの方が、噂の麒麟児等と呼ばれる「袁 魄麒」様、と……

それから気絶している間に戦いは終わり。

私が目覚めると、袁家が治めている町の一つの家に寝ていたのです。

それからは、城の前にある看板を見つけ

一目でも見れたらと

一声でも声かけられたらと

兵士募集に応募し

龍二様から声をかけられ、今の副長の位置までのし上がったのでした。

だから私は

あの方を

生涯の主と

あの方の背中を守ると決めたのです

「でも、今は……」

背中だけでなく、隣りを貰おうと

頑張りたいと思います。

だから、無事に帰ってきてくださいね龍一様？

拠点一 & 1 t ; 浮華 & g t ; 貴方に出合って (後書き)

皆さんども

梅干しです

何か最後に納得がいかない…

スランプの上にリハビリか…

頑張ろう… w

では、また次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4578/>

---

真?恋姫無双～名門の血筋～

2011年3月19日18時27分発行